

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

DePOLA ^{でほら} 46

2015年



特集

若者の地域貢献活動



[若者の地域貢献活動]

●特集企画に寄せて



▲急斜面の柑橘園で作業する「農音」の若者



▲高根地区でひまわりの種を蒔くボランティアたち



▲油木高校／蜜蜂の内検作業をするミツバチプロジェクトの生徒



▲名寄産業高校/名農キャンパス農場



▲楠くリーン村／茶園での作業



▲名久井農業高校/リンゴ園で摘花作業をする生徒



▲奄美大島で塩づくりを手伝う「島キャン」の学生



▲『もんでこい劇団』公演の一コマ



▲ビジョン早田実行委員会／定置網漁



▲「だいたらぼっち」に帰宅した山村留学の子供たち

日本列島を襲う過疎化・少子高齢化は、都市も巻き込んで止まることがない。若者がムラを出ていった地域で農林業を支えてきた高齢者たちが減っていき、集落が消滅する危機に直面している地域もある。

しかし一方で、いきいきと働く人々の姿や農産物が豊富な地域、子供のにぎやかな声がある地域も増え、そこにはUターンやIターンした若い世代がいる。総務省等が推進する「地域おこし協力隊」も現在全国に1629人（平成26年度）が派遣され、その6割が任期の後も同じ地域に定住している。

いま学生や若者、企業人を対象にした農山漁村体験ツアーやインターンシップ、林業体験ツアー等が増え、人気を呼んでいる。呼びかけ人は農山村を活性化したいと活動するNPO団体等で、インターネットを通じて参加ボランティアを募集しており、その成果は大きい。

当初は遊び心で参加したツアー者が、豊かな自然と美味しい食材、迎えてくれる人々の人情にふれ、汗して働くことの充実感を体得していく。都市生活では決して得られなかった体験を通じて、いつかかけがえない仲間が出来、訪ねた地が第二のふるさとなっていく。

しかし移住した第二のふるさは、休耕地は荒れて鳥獣被害があったり、その地を耕して収穫した農産物も安価で、自立的生活を送るのは厳しい。

それでも若者たちは大地の恵みや先人たちの知恵に感動し、それを仲間にも発信する。苦業も含めて田舎暮らしを楽しもうと発想する新しいタイプの若者たちである。

今回は、農山村の新たな担い手として期待される移住した若者グループ、農業後継者を育成する高校、農山漁村を知るためのツアー等を紹介する。

特集/[若者の地域貢献活動] ●特集企画に寄せて——2



■若者たちが地域で学ぶ・働く

・島の柑橘園を受け継ぐバンドマンたち

NPO法人[農音]の挑戦 愛媛県松山市中島——4

・農を軸に「生きがいの仕事作り」 楠クリーン村

NPO法人[学生耕作隊]
山口県宇部市楠——8

・高根の暮らしを明日へつなぐ

[共存の森ネットワーク][キャノングループ]
新潟県村上市高根——12

・450人の子供たちの第二の故郷 暮らしの学校[だいだらぼっち]

NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター 長野県泰阜村——16

・奄美大島他で大学生が[島キャン]

島の魅力発見とインターンシップ(就労体験)——20

■農業のプロを育成する高校の取組み

・休耕地を花と蜜蜂の丘に

油木高校[ミツバチプロジェクト] 広島県神石高原町——23

・地域の農業と共に

名久井農業高校の農家支援活動 青森県南部町——26

・道北農業の未来を担う

北海道名寄産業高校 北海道名寄市——29

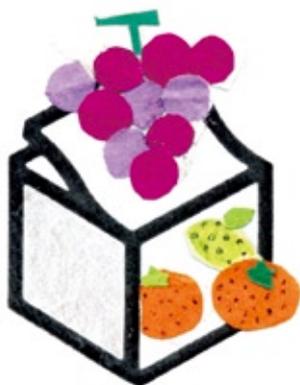
■平成26年度過疎地域自立活性化優良事例

・若手漁師や「笑顔食堂」が地域の活力

[ビジョン早田実行委員会] 三重県尾鷲市早田町——32

・ふるさとへもんでこい! 熱烈ラブコール

[もんでこい丹生谷運営委員会] 徳島県那賀町——36



■ INFORMATION 38

- ・若者が北海道各地で環境ボランティア活動
NPO法人[ezorock]
- ・マツタケ山の整備から防災林の再生まで
NPO法人[森のライフスタイル研究所]
- ・地域再生に貢献できる若い人材の育成
文科省の[大学COC事業]

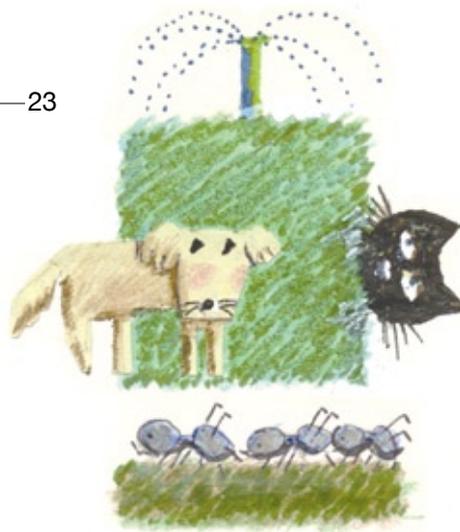
○全国過疎問題シンポジウム 2015 in かがわ
編集後記 奥付け 39

「でぼら」とは——

Depopulated Local Authorities (人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体)からのネーミング。

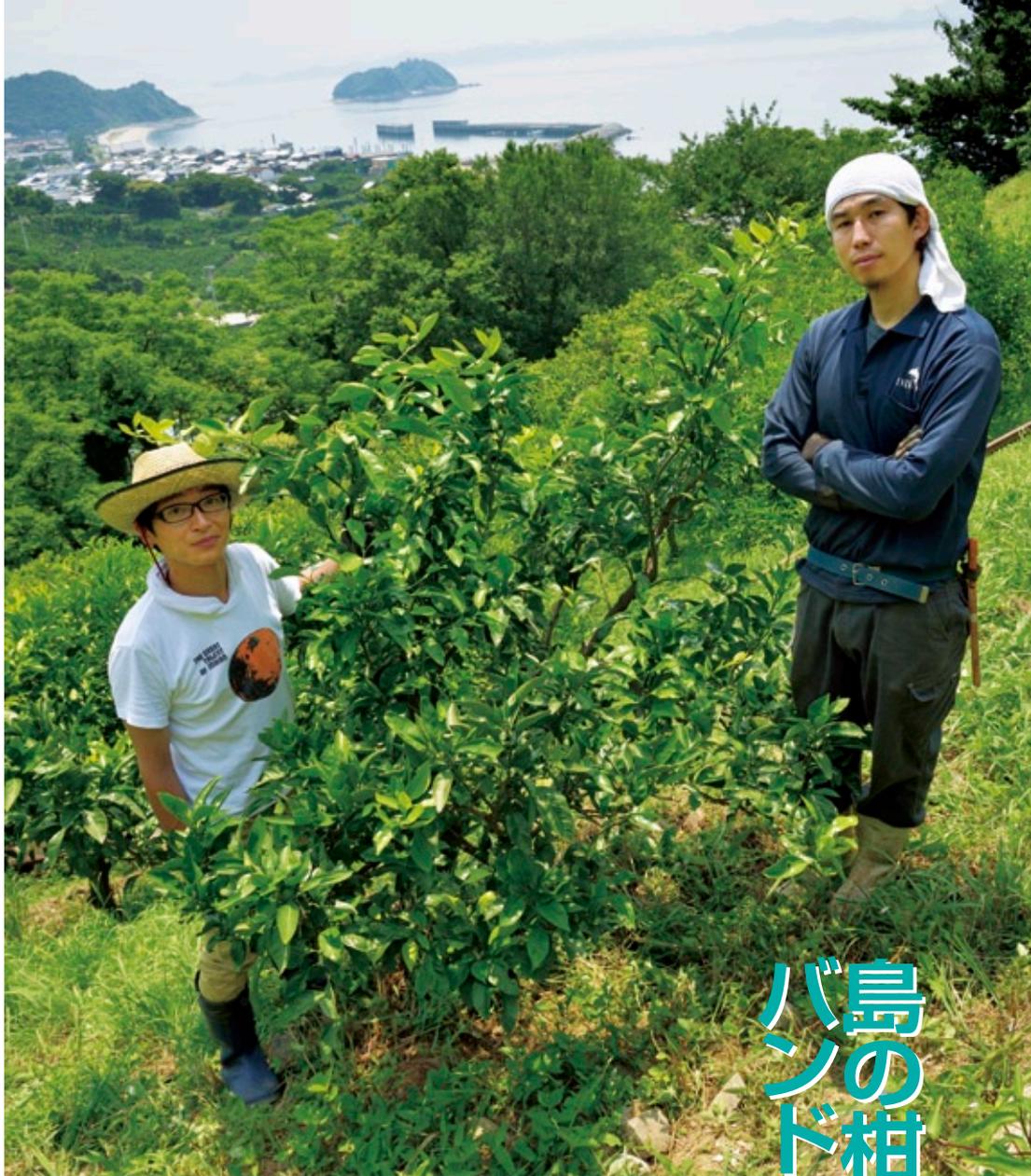
過疎市町村の多くは山間地や離島など森林面積の多い農山漁村地区で、全般に人口の減少や高齢化が進んでいます。国土の保全・水源のかん養・地球の温暖化の防止などの多面的機能により、私たちの生活や経済活動に重要な役割を担っています。このような過疎地域は、豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、過疎地域と都市地域が交流をすすめて、共生していくためのホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として「DePOLA」(でぼら)を発行しています。



●表紙写真

上 / 村上市高根地区の田植えに参加した「共存の森ネットワーク」[キャノングループ]の人たち
左上 / 北海道名寄産業高校一年生牛を日光浴させながら身体を洗浄
左下 / 名久井農業高校農家支援活動でリンゴ園で剪定・摘花作業をする一年生
右 / 油木高校ミツバチプロジェクト蜂の内検作業をする生徒たち



島の柑橘園を受け継ぐ バンドマンたち

NPO法人「農音」の挑戦

人口減って、イノシシが増えて——

松山市北西部の高浜港から朝7時発のフェリーに乗って約1時間。睦月島、野忽那島を経て中島の大浦港に8時過ぎに到着した。中島まではフェリーが一日7往復、高速船が9往復しており、松山北高校中島分校へ通学する生徒も20、30人乗船。「島へ行く」というイメージはない。

9時を回ったころ、大浦港の待合室にNPO法人「農音」代表理事の田中佑樹さんが駆けつけてくれた。「今朝は地区の農道補修作業があったので、遅れてしまいました」と車を降りてきた。自動車の中には草が附着したままの草刈機。田舎暮らしの心得は、地域の共同作業に参加すること。という現場をいきなり目の当たりにすることとなった。麦わら帽子がよく似合っている。

田中さんは、音楽仲間を島に呼んで柑橘畑の作業を提案した張本人で、代表を担う。「僕の仕事は『農音』の運営ですが、でも年中畑に入っています」という。

移住先を中島に決めたのは、奥さ

瀬戸内海の中でも柑橘栽培が盛んな中島だが、農家の高齢化で急斜面の畑は耕作放棄が深刻だ。「好きに音楽をやるなら東京でなくとも、もっと環境のいい場所があるのでは？」という発想で首都圏のバンドマンたちが移住を開始。移住促進による地域活性を標榜するNPO団体「農音」を設立し、移住後は就農して柑橘畑の維持に取り組んでいる。現在は音楽とは関係なく移住す

る人も増え、その数は30人を超えた。首都圏に残ったまま移住した仲間の活動を支えるメンバーもあり、これまでの活動に関わった人数は100人を超えるほどになった。中島では高齢化と人口減少が進み、イノシシが急増している厳しい現実のなか、青年たちは農作業や農産物の販売、移住促進のための地域づくり等に励んでいる。

▲山の天っ辺の柑橘園で作業する田中佑樹さん(左)と岩上貴俊さん
◀島は平地が少なく、斜面にも柑橘園が広がっている



んの祖父母が住んでいた空き家があったため。中島の美しい自然と過疎の現状を知り、島への移住を決意したという。松山市出身で、東京の大学で工学を学び、卒業後はアルバイトをしながら音楽活動を続け、ロックバンドではベースを担当していたという。

「まずは島を一通りご案内しましょう」と、車に乗せてくれて、島の北部地区から回るようになった。「この車、島の車屋さんで2万円の手に入れました。車を買うにも家を借りるにも、金額が都会の感覚とはまるで違うんですよ」と田中さん。

中島は忽那諸島最大の島で総面積21.17km²。島の大半が柑橘園で、日本一の伊予柑産地として知られ、初夏には島全体がミカンの香りに包まれるという。人口は現在2,938人、20年前に比べると半減している。「人口は毎年100人ほど減っている。代わってイノシシが猛烈に増えて人口と同じほどになっています」と苦笑する。

最初に案内してくれたのは北東部先端にある大泊集落。かつてはイワシ漁で賑わった地区だが今は2、3軒だけになり、廃屋群が蔭に覆われて見る影もない。目の前は海底が見えるほどの美しい海、背後には豊かな森が広がる穏やかな里なのに、何があったのだろうか。「過疎化が進み島の将来が不安ですが、島の人は意外と平然としている。仕方ない、なるようにしかならないという姿勢になってしまっているのかもしれない」と田中さんは言う。

平坦地に立てられたビニールハウスでは『紅まどんな』という高級柑橘を栽培している。農音でも接ぎ木を施し、現在育成中だという。

その近くにはイノシシ捕獲用の檻があった。イノシシについては後述することにして、まずは島内一周へ。

中島の柑橘の美味しさの秘訣は、長い日照時間と海からの潮風、栽培農家の旺盛な研究心と惜しみない努力にあると言われる。島の全域で栽培され、どの集落も海辺を幹線道路が走り、道路に沿って家が並び、その裏手はミカン畑になっている。かつては山の天つ辺まで耕作され、モノラックと呼ばれる貨車を設置して効率化を図ってきた。

島内でも地域によって農法に微妙な違いがあり、島の西側は、南東地区に比べると日照条件や風の影響からか、柑橘のハウス栽培が多く、新品種に関しても研究熱心な農家が多いという。

フェリーが発着する神浦地区は、南に面しているので柑橘栽培に最も適している場所の一つ。農家の誇りと結束力が高く、生産される柑橘もトップクラスの品質だ。そのため農業経験のないよ者には少しつき合いくいところもあり、同地区の山の斜面にある園地を耕作することになった時、「最低限、周辺の園地に迷惑をかけないように」とたしなめられたり、柑橘畑に雑草が茂っているのを見て「真面目に耕作しとるのか」と咎められたこともある。

「移住してくる人は農業経験ゼロが殆んどなので、十分な知識もありません」なんとなく農業は使いたくない」と思っている人が多いようです。確かにその気持ちも分かるんですが、この土地で長年培われてきた宮農のノウハウを否定するような言動を取ってしまうのはや



▲島を一周する道の端に実っていた甘夏



▲取材中、地区の清掃活動に参加する田中さん



▲農音の園地で育っている「清見」の新実



▶柑橘の出荷用段ボール箱。
Tシャツからパンフレットに至るまで、
デザイン一つにもこだわっている

はりダメです。もし本当に無農薬を徹底したいなら、ベテランの方にも認めてもらえらるくらいの研究と努力が必要です」と田中さんは語る。

暑い斜面の上には、 太陽と柑橘が待つところ

田中さんたちが、中島で柑橘栽培を始めたのは平成23年、今年で4年経つ。高齢化で継続がままならなくなったミカン園や人手が足りない農地の作業を手伝いながら、生産者から栽培技術を学び、グループで畑を借りて耕



作をはじめた。一方で収穫した柑橘や加工品は、都市にいる農音のメンバーの協力を得てインターネットを中心に販売し、SNSなどで中島のPRにも力を入れている。

訪ねてくる仲間や移住を考える人も年々増え、行政との連携も出来てきたことから、昨年7月にNPOを法人化した。現在、耕作放棄または農家が高齢化して畑仕事ができないというミカン園約2haを借り受けて栽培している。といっても畑は8カ所に点在し、中には45〜50度の斜面もあるので、現場へ行くのも一苦労、作業はきつく効率も悪い。

宮野地区で作業する岩上貴俊さん(30)を訪ねた。柑橘園までは細いながらも農道が整備されている。行き止まったところに車を駐め、古いモノラックのレールに沿って進む。生い茂る柑橘の木々が途切れ、苗木の植わった急傾斜に差し掛かったあたりで岩上さんが草刈りをしていった。

東京では即興演奏を中心とするロックバンドでラップを担当していたが、何度か中島を訪れるうちに、農作業が自分の性格に合っているとわかり、昨年1月に神奈川県の大和市

から移住してきた。

「都市生活だと人が多いのでストレスを受ける場面も多々ありますよね。その点、畑で眼下に瀬戸内海の美しい風景を見ながら作業することにストレスは少ないです。自分が剪定した木に実がつき、大きく育つのを見るのも楽しみです」と岩上さんは言う。

今、岩上さんが特に力を入れているのは「はるか」というレモンに似た春の爽やかな柑橘。この春には40本の苗を植えた。他所を含めて合計160本を植樹したという。ミカンは収穫までに早くて5年かかり、接ぎ木でも3年は収穫できないという。その間も施肥を年3回、下草刈りも年数回は必要。最も大切で技術を要するのが樹木の整枝と剪定、摘果作業で、良好な実を育てるために着果過多にならないように実を摘果していくそうで、摘果の具合は品種により1果に対しての葉の枚数が様々。それらを基礎知識として知っておく必要がある。さらに摘果の作業は7〜8月の炎天下がメインになるので、作業そのものは楽でも体力的にはキツイ。おまけに、油断すると転がり落ちそうな斜面だから大変だ。

「勾配が40度から50度近い場所もあります。かつての農家さんたちは、そんなところにまで石段を築いて土砂の流出を防ぎ、木を植えてきた。そこまですて山を開墾してきたのは、少しでも良質のミカンを、少しでも多く作るため。とてつもない努力の賜物です」と田中さんは言う。

剪定の仕方や接ぎ木、なるべく農薬の使用を抑える病害虫対策等々、学ぶことは多く、さらに雑草との戦いやイノシシ対応も重要で

ある。話す間にもゴマダラカミキリを見つけ、素早く捕まえて処理した。放置すると木を枯らしてしまう害虫の一つだという。柑橘類の若葉は蝶の幼虫も大好物らしく、チョウチョが上空を沢山飛んでいる。病害虫が発生すると、結実した実はもちろん、木そのものにも悪影響がある。

しかし「農音」としては見た目をきれいに保つための農薬は極力使わない方針で営農している。もともと消費者側から生産者側に転身した立場なので、「味さえよければ、消費者はそこまで見た目を気にしないのではない



▲「はるか」の苗木を手入する岩上さん



▲仏で園芸職人をし、昨年移住してきたミカン栽培をするエドワーさん



◀イノシシ捕獲器。ミカンやスイカなどその時にイノシシが食べるものを入れる

か？」と感じているからだ。とはいえ、農薬を使わないことで周辺の園地に迷惑をかけてしまいそうな場合は、その限りではない。「大変ですが、畑に毎日来ているといろいろ発見し気付くことが多いのが楽しい。マイペースでやれる範囲でしていきます。昼休みは長めに取れますし」と岩上さんは午前中の作業を終えて、昼食のため山を下りて行った。Tシャツのデザインも手がける趣味人で、Tシャツはインターネットで販売し、エッジの効いたデザインが若い世代に人気だ。岩上さんの作業していた柑橘園にほど近い斜面で、フランス人のエドワーさんが作業をしていた。奥さんは日本人で、その日は船舶免許を更新するため松山市に出かけて留守。エドワーさんはフランスでは園芸職人をしており、1年半前に夫婦で移住し農地を借りて柑橘を栽培している。

ミカン味がする 良質な肉

いま、もう一つの問題がイノシシの急増。イノシシは嗅覚が発達しており、柑橘が大好きで、出荷前の完熟ミカンを狙い、しかも皮

をむいて食べるのだという。美味しい粒を取るため木に登り大切な枝を折ってしまう。不味いものと美味しいものを置くと、被害に遭うのは美味しい実だそうで、手入れした畑ほど被害が出やすい。各所を電気柵で囲っているが、柵を突破されるケースも出始めている。昨年は中島だけで800頭余りを捕獲処分、田中さんも猟銃と罠の免許を取り、島民で結成されたイノシシ被害対策組織に加入して駆除にあたっている。

「10年前まではほとんどいかなかったと聞いています。どうやら広島方面から海を渡ってきたようです。瀬戸内の島々のなかでも、いま山の上まで園地が残っているのは中島くらいで、味も超一級の産地です。何とかイノシシの被害から守らないと」

行政も駆除に対して奨励金をだし、松山市もいよいよイノシシ肉の有効利用を模索し始めた。「知り合いのレストランや料理人に食用してもらったところ、ほのかにミカンの味がすると好評です。臭みがなく、肉もやわらかくて美味しい。駆除数が増えると今度はその処理が問題になります。肉を有効利用していくことで少しずつ解決していきたい」と田中さん。農音が主催している移住体験イベント『島に住む』では、海辺でイノシシ肉のパークューも行い、好評だという。

「ミカン農家としてはまだまだ」 「いじではもったいないよ!」

田中さんが師匠として尊敬し、柑橘栽培のアドバイザーや島での暮らしを支えてもらっているのが東伸之さん(80)・利枝さん夫妻。田

中さんが暮らす義祖父の家に近く、宮野地区を代表するベテランの柑橘農家である。

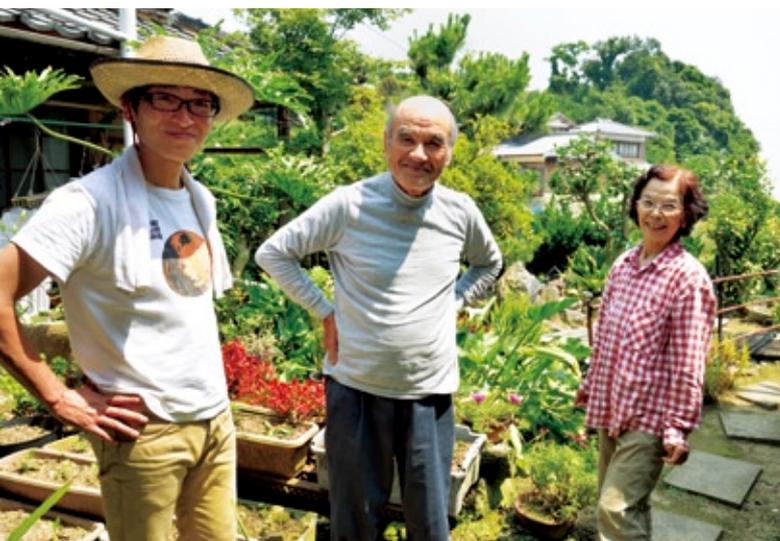
田中さんたちのミカン栽培について師匠に聞くと、即座に「まだまだ」と返答。「よく頑張っているけど、ここらの年寄りが一年中作ってきて納めできないことがあるんだから」と笑顔で答える。

利枝さんが言う。「佑樹君がいきなり友人2人と現れて、ミカン栽培をしますと言ったときは驚いたわね。その半年後の間に『農音』のことは日本中に広まり、毎月島に若い人がやってくるようになった。よく働くし文章もうまいし、なんでも出来る。ここ(と頭をさして)が違う。居てくれるのは嬉しいけど、もったいないよ。他で働けば高い地位についていっばい稼げるのに——」。

いつも言われているように、田中さんは笑って聞き流している。

「これまでに中島へ移住してきた人は皆ここを気に入っているようです。金銭的には決して裕福ではないのに不思議です。きつとお金ではない充足があるんですよね」と田中さんは言った。

文／浅井登美子
写真／小林恵



◀田中さん(左)と移住者たちが「農音のお父さんお母さん」と慕う東さんご夫妻



▲茶園で、高田さん(左)と栃内さん

農を軸に「生きがいの仕事作り」 楠クリーン村 NPO法人「学生耕作隊」

宇部市の西部、旧楠町の山間部にある「楠クリーン村」。山林と茶畑がメインの約20haの台地で、学生や若者が、耕作放棄された茶園を再生してきた。若者たちは伸び放題だった茶木を選定して製茶加工を手がけ、さらに畑を開拓して野菜や果物栽培をしている。NPO法人「学生耕作隊」のメンバーはいま9人。農業技術や風土を継承しながら、住いや倉庫等も手造りし、ソーラーによる電力も導入している。「農家が借金せずに生きていける」農の自立や新たな仕組みを提案したいと挑戦中だ。

耕作放棄された茶園を再生する

市街地から車で30分ほど北部をめざしていくと、山林を背景に水田が広がる里山になり、やがて青葉が覆う山林の中に「楠クリーン村」「学生耕作隊」の小さい看板が現れた。それに沿って入っていくと右手奥の方に茶畑、左手の斜面では数人が畑仕事をしている。間もなくいくつかの建物が建つ広いスペースが現れた。

木造2階建の建物の玄関には沢山の長靴やカッパ、スニーカー等が置かれ、繋がれた犬が親しそうに近づいてきた。

出迎えてくれたのは、NPO法人学生耕作隊理事長の高田夏実さん(24)と事務局長の狩野圭太さん(30)。事務机がいくつか並び、手前には大きなテーブルが置かれている。住まいも自分たちで建てていると聞いていたが、まさかこんな大きな建物は無理だろうと尋ね



◀道路脇に 楠クリーン村、学生耕作隊を示す小さな看板。左は収穫期を迎えたブルーベリー



ると、「大工さんにアドバイスを頂きながら、自分たちで作りました」と高田さんは言い、「床が少し傾いていますのでご注意を」と椅子をすすめてくれた。狩野さんがほうじ茶を煎れてくれた。自家製の茶で、色は薄いが香ばしく香りがいい。

「NPO法人学生耕作隊」がスタートしたのは平成14年。山間部の多い日本で農業で食べていくのは困難といわれる時代。山口大学の学生たちが中心になり農家の仕事を手助けしようと山口県各地の圃場に援農として通い出した。その活動を続けるうちに「援農だけでなく、茶園や農地を自分たちの手で耕していかないかというお話を頂くようになり、現在の拠点を継ぐことになりました」という。

平成19年から耕作管理を任せられた農地は山林や草地を含めて約20ha。茶園を中心に耕作していくと共に、自分たちの手で新たな食住クリンなエネルギーを創出していくことになった。地域の農家から使わなくなった農機具や木材等を寄贈してもらい、研修施設や厨房、五右衛門風呂等も建設してきた。

当初はインターンが定期的に来たり長期休暇を利用して再生活動を行ってきたが、それでは十分な管理が出来ない。平成23年には、定住して農作業等に参加できるスタッフが集まり「楠クリン村」を開設した。現在20〜30代のスタッフ9名（男子3名、女子6名）が農地内や近くで暮らして農場の作業を行っている。

地域の農家は茶栽培・加工、野菜作りの指導等に協力してくれ、たまに野菜等を届けてくれる。またインターン希望の学生が引き続

き来村、その日も2名が東京から来てブルーベリーの収穫作業に当たっていた。

さらに学生耕作隊は全国各地から集まった寄附を活用して、5年前からカンボジアのオクルカエ村、インドネシア・フロレス島等の仕事作りにも取り組み、活動の幅を広げている。

カンボジア産カシユーナッツを加工販売、緑茶とブレンドした商品「カシユーナッツグリーンテイ味」を発売、彼らの何人かが楠クリン村へも訪れている。

「いいは凄じ」と移住を決意

理事長の大役を務める高田夏実さんも、2年前に大学を出て楠クリン村に移住してきた一人。横浜市出身、大学で社会学科を専攻し地域問題に関心を持った高田さんは、3年生の時に楠クリン村を訪れた。その時の感動が高田さんの原点だと言う。

「ここは凄い、私の居場所はここに違いないと思って、長期休みのときは必ず来て農作業などの手伝いをしました。この組織の泥臭さ、嘘がなく真つ向から挑む姿勢がここで働く人からにじみ出ていた。それでいて、ひよいひよいと常識を超える発想力と自立への強い思いを持っていて。失敗が怖くていつも遠くから様子を見てきた私でしたが、『何かやりたい』体当たりしてやるぞ」と入村を決めました。いま住んでいる人も皆インターンの出身。何度か来て手伝い、住んでみて、納得して移住して来ています。一緒に生活を共にするので濃密な人間関係が出来ますが、いわゆる集団生活とは異なり、それぞれが個性的で結構

身勝手、だから意外性もあり楽しいんです」と高田さんは言う。

事務職の他に、家屋や倉庫を建築したりソーラーパネルの導入等を担当しているのが狩野圭太さん。入村6年、今では小規模な一戸建てハウスなら短期間に建築してしまうという腕前になっている。

「大学は建築とは関係ない東京の大学です。テレビで楠クリン村が共同運営する吉田屋という旅館を見て、就活を止めてインターンに応募しました。来てみたら一日中茶畑の堆肥まきや農機材の片付け、おまけに寝る場所はエンジンのかららないキャビンゲカーの中。春先の冷え込む中で布団に丸まって耐え忍んだものです。でもここなら自分のすべてをぶつけても受け止めてもらえるという圧倒的な安堵感と幸福感を覚ええました」

建築は地元の大工さんのアドバイスと現場、書物で学んだ



◀左上/事務棟の前で散歩に行くのを待つ犬のルル
左下/草原のアイドル、山羊のミツコ
右/畑を案内してくれる高田さん

▶昼食の準備をする脇さん(左)と福田さん
▼事務棟へ運んで、全員集合で「いただきます」



という。インターン生が宿泊できるハウスも徐々に整備し、年内には新たな研修施設の完成を予定している。

茶園を再生するのに5年間

太陽が広場の真上に来た頃、右手にある厨房棟では昼食準備がはじまった。今井智衆さんが玄米を精米器に入れて白米を用意し、台所では当番の2人の女性が野菜と肉料理を作っている。かなり本格的だ。「朝食は畑仕事で忙しかったために簡略に、その代わり昼食はしっかり作り全員そろってしっかりと食べるようにしています」とのこと。

天井にはソーラーパネルで得た電力で小さなライトが点灯している。お客様を呼ぶスペースには公共の電気を引く予定だが、他は出来るだけソーラーパネルで発電した電力を活用しているとのことだった。

我々も町へ出て、温泉とレストラン、農産物等の売店がある「こもれびの郷」へ。売店では地元製茶会社の「小野茶」と並んで、学生耕作隊が収穫・加工した無農薬の煎茶やほ



うじ茶が「山口県楠でぼくらが作ったお茶」と印刷されて売られていた。無農薬栽培でもあることから、一般商品に比べてやや割高になっているが、上品な風味に溢れた特上品であった。

午後からは、その茶園を見学させてもらった。緩やかな斜面に丸く刈り込んだ茶畑が広がり、全部で1haもある。茶園の担当の栃内めぐみさんは、「当初は茶の木が2m、3mと伸び放題で、剪定が大変だったようです。機械を使って茶摘み作業が出来るようになるまでに5年かかりました。農家からいただいた摘取機を使い、加工場で茶葉の加工もしますが、農家の人は、腕前はまだまだだと辛辣です」と苦笑する。

5月のゴールデンウィーク頃に若芽を収穫して作るのが一番茶(煎茶)になり、続いて6月末頃に摘むのが二番茶(ほうじ茶)になる。さらに秋から冬にかけても剪定が欠かせないそうで、結構手間暇がかかる。

脇悠子さんは島根県温泉津温泉「吉田屋」の料理長をしており、「私たちが作るお茶は温

泉でもとても好評です」という。平日は楠で働き、週末はファームで取れた野菜等を持参して吉田屋で料理長を務めている。

吉田屋は木造3階建の大きな老舗旅館だが、後継者がいなくなったため、楠クリン村が後継創業することになったもの。

村では今年から茶摘み体験ツアーを始めた。「ここは、自給自足の生活と農を軸とした仕事に挑戦できる貴重な場所です。アジアとも交流があるので、吉田屋に行けばカシューナッツグリーンティ味の製造体験もできます。各地で、耕作放棄が増え続け、本当に日本が食べていけない日が来るといふ危機感を持っているので、日本でもアジアでもどこでも、地域の農×生きがいの仕事を作る、どこでも働ける人材の育成も目的です」と高田さん。

丘は見事なブルーベリー園

ワラビが生い茂る草地にはミツコという2歳の山羊が飼われ、その先の日当たりのよい丘にはブルーベリーが植樹され、収穫期を迎えていた。ブルーベリーには20種ほどあるが、島根大学の先生たちが開発したラビットアイ系、ハイブリット系の品種で、大粒で濃密な味が特徴だという。

作業している今井智衆さんは鎌倉市出身。学生時代に楠クリン村へインターンした後、カシューナッツのカン

◀ブルーベリーの収穫をする脇さんたち



●NPO法人学生耕作隊/楠クリン村 ☎080-5802-4705
jikyuu-club@shakai-kigyo.net

ボジア・オクルカエ村で1年間働いた経験を
経て、楠クリーン村に昨年春に移住してきた。

もう一人が高田さんの大学後輩で4年生の
松浦直矢さん。インターンで来て収穫を手伝
っていた。「高価なものですから、完熟して
いるかを確かめながら丁寧に摘んでいます」
と緊張気味で作業している。

ブルーベリーは、朝採れを午前中に梱包し、
その日のうちに会員に発送、一部は契約して
いる店で販売している。

「この大事な収入源です。天気と相談しな
がら今は皆で作業しています」と語る枋内さ
んは神奈川県藤沢市の出身で3年前に移住、
野菜作りに興味があるという。「多品種の野
菜を栽培していますが、今年は天候不順のせ
いか生育がよくありません」と嘆いていた。

農業の自立と地域づくりのために 売店、カフェのオープンをめざして

農園の脇には狩野さんが建築したばかりの
ログハウスがあり、近くには今年の春に完成
したバイオマストイレもあった。周辺は竹林
で、春は竹の子、ヨモギ、ワラビと山菜の宝
庫だが、初夏ともなるとそれが茂って雑草地
になってしまう。

高田さんが次に案内してくれたのが、丘の
下にあるパン焼き工房。工房には下に薪を入
れ、上でパンやピザを焼く本格的な石窯が設
置されている。近い将来、売店やカフェを開
設する予定で、石窯焼きパンは楠クリーン村
の看板メニューとして人気を呼びそうだ。

その奥の道路脇に建築途中の建物が3棟あ
る。一つは木材を組み上げた大きな建物。道

路の反対側にはインドネシアの青年たちがデ
ザインしたというユニークな家とイベント会
場にと計画した三角の家がある。

建築担当の狩野さんらもやって来た。

「三角の家は年内に完成する予定です。屋根
は断熱材を入れてしっかり作ってありますの
で、あとは窓やドアを設置すればいい。近所
のお百姓さんが硝子をくれましたので、これ
に木枠をはめて設置します」と狩野さん。

同じく建築担当の福田由里恵さんは、今年
3月に入村してきたばかりで、美術大学を卒
業後舞台美術の現場で働いてきたという。狩
野さんは「電動機器を一通り使用できる人な
ので、頼りにしています」と言い、福田さん
は「少しでも完成に向けて手伝いたい」と答
えた。

高田さんは理事長としての立場から、学生
耕作隊と楠クリーン村の次なるステップとな
る「地域計画」を策定している。農業の仕事
を細分化し、地域に住む誰でもできる仕事
を一覧にしている。福祉サポートが低下するこ
とで格差が広がりやすい障がい者、高齢者な
どが、「農の仕事作り」でいきいき働ける地域
をつくること。現在は寄付（会費）等で運営
しているが、農産物の生産加工に付加価値を
つけて販売すること、さらに地元農家や地域
都市の人と交流を深めていくために拠点施設
や売店、カフェ等を設けていく計画で、未完
成の施設を完成することが今年の重要テーマ
でもあるようだ。

気になるのは運営費である。継続的に寄付
をしてくれる応援者に加え、現在会員は100
人ほどいて、1万円の会費で年3回ブルーベ

リーや製茶、みかん等
を送っている。その他
にお茶、ブルーベリー
の小売り販売や卸販売
があるが、自治体等か
らの助成金は支給され
てはいないようだ。高
田さんは「農の仕事作
り」の事例を作るため
の初期投資として、び
つたりの予算があれば
どんどん使いたいと考
えていると語っていた。

文／浅井登美子
写真／小林恵



▲名古屋コーチン、チャボ等も飼育



▲実験的に作ったパン焼きの石窯
▲年内に完成をめざす建物前で、福田さん
(左)と狩野事務局長



▲収穫したブルーベリーを会員へ発送



▲インターンできた松浦さん





高根の暮らしを明日へつなぐ

「共存の森ネットワーク」
「キヤノングループ」



新潟県最北部に位置する山間部集落・高根地区は棚田での稲作が盛んで、特A米の産地。ここに片道5、6時間かけて毎月のように東京などから学生や会社員たちがやってきて、一泊二日で野良仕事や地域行事を手伝い、地元の人と郷土料理を味わう。「聞き書き甲子園」に参加した高校生らが、地域の自然とともに生きる暮らしを学びたいと11年前にスタートした「共存の森ネットワーク」の活動は全国7地区へと広がり、今では高根地区に移住して林業を担う若い夫妻もいる。取材に訪れた日は、「キヤノングループ」の社員・家族28名と共存の森ネットワークの学生10名が参加、地元高根フロンティアクラブの人々に迎えられて、春一番のイベント・田植えとひとまわりの種まきが行われた。

高根は新潟の中でも「特A」の米どころ

村上市は鮭、北限の茶、地酒、岩船米、新鮮魚介類で知られる城下町。鮭が遡上する三面川の支流である高根川源流域にあるのが旧朝日村高根地区で、朝日連峰のすそ野に広がる豊かな自然郷。高根地区の面積は約9,850haで、172戸、700名余りが暮らしている。山林が約8割を占めているが、農地の大半

▲総勢50人で一斉に始まった田植え作業。広い田が小さく見える

▼旧高根小学校は人気のレストランIRORIIに变身



100 haが水田で、雑木林を抜けると田圃、森の上にもまた田圃という具合に、水田地帯が点在している。山を切り拓いて造成された水田は、一枚当たりの面積は比較的小さいが、どこも機械化作業ができるように圃場整備され、よく手入れされている。5月下旬に訪ねたときは、ほとんどが田植えを終えていて、青空を写した田圃にはすっかり根を張った若苗が春風にそよいでいた。野鳥の声と水の音がバックミュージックのとびきり美しい里山風景である。

集落の中心部、高根川沿いには民家が寄り添うように軒を連ねており、どの家も豪雪に耐えるような強固な木造住宅。空き家はほとんどなく、植木や草花などもよく手入れされている。

集落の入口にある高根小学校は平成12年に廃校となったが、一部を山のおいしき学校食堂「I R O R I」として土日祝日限定で開店している。地元産のそば粉をその日の朝、石臼で挽いて手打ちする十割蕎麦と山菜、イワナなどの山の幸を活かした伝統料理等が人気を呼んでいる。東京から田植えで訪れる若者や家族グループも、まずI R O R Iで昼食するのが恒例のようで、職員室を利用したレストランは客がいっぱい。慣れた様子で女子大生らが膳運びを手伝っている。食堂の一角では、10年前に校舎の一部を作業場にして製造販売を始めたどぶろく「雲上」と高原野菜・山菜、イワナ燻製等が販売されている。

午後1時30分、東京からレンタカーで来た「共存の森ネットワーク」(以下「共存の森」と略)の若者10人、東京や新潟市などから来

たキャンングループの参加者28名が集落の中心部にある高根区民会館に集合した。出迎えるのは、高根地区の活性化に取り組むグループ「高根フロンティアクラブ」の人たち約10名。普段は会社勤め、建設会社、棟梁等として働く高根在住の人たちである。

皆さん、ほとんどが顔なじみらしく再会を喜び合っていた。

高根区民会館は平成15年12月に完成したという重厚な木造平屋建てで、「樹齢300年以上の地区の檜を大黒柱にして、楓の古木4本を床柱に使っているのや」と地域の人が自慢するように、入館するとまだ木の香が心地いい。小部屋や厨房の奥には100畳ほどもある畳敷きの会議室があり、いくつもの部屋に区切られるように設計され、地域の交流の場になっている。

「未来につなげたい高根の暮らし」 共存の森、キャンングループがめざすもの

さて、集合した共存の森、キャンングループのメンバーたちは、2時から30分ほどオリエンテーションをして、田植えをする水田へ向かうことになった。

「今日は若い男性が多くて嬉しいねエ」と高根フロンティアクラブの世話人が言った。

共存の森ではこの日、千葉県原市や岡山県日生町他でもフィールドワークがあり、高根に出かけてきたメンバーは10人。ほとんどの学生が昨年も参加しているが、アメリカに留学中だが休みを活用して参加した女性、昨年4月に宮城県の森林管理署に就職したという男性もいて、お互いの再会を楽しんでいる。

認定NPO法人「共存の森ネットワーク」は、農山村で暮らす人々を高校生が訪ねて聞き書きして発表する「聞き書き甲子園」の第一回目に参加した高校生が中心になり結成した共存の森づくり活動。

聞き書きに加えて、農山漁村で暮らす人々や地域に高校生・大学生らが行って農林業等を体験・交流するもので、現在7地区で活動を行っている。

高根には、早くから同地区と交流してきた一期生の能登谷創さん(28)が「高根の棚田を守り、暮らしを支えるブナの森を作りたい」と、平成19年6月に共存の森メンバーが参加して住民たちと天蓋高原にブナを1600本植樹した。それを機に共存の森の北陸の活動場所として、年間を通して米作りを体験すると共に、

棚田の耕作状況調査、米づくりの現状と将来に対する住民の声をアンケート、翌20年にこれらを棚田調査報告書としてまとめ、「未来につなげたい高根の暮らし」と題してセミナーやシンポジウムを開催した。その後も後輩の学生達が、水路の調査とマップ作り、高根での聞き書きを「たかねのね」という冊子にまとめるなど、啓蒙活動にも熱心に取り組み、高根地区のPRに大きく貢献している。

▼高根に移住してきた能登谷創・愛貴さん夫妻



▼挨拶をする高根区長の相馬さん



▼I R O R I人気の手打ち蕎麦定食



能登谷さんはその後高根に移住して森林組合に勤務、同じく「聞き書き甲子園」の一期生である愛貴さんと昨年結婚した。移住してきた美男美女は集落をあげて祝福され結婚式が行われた。

一方、キャノングループは「未来につながるさとプロジェクト」として、国内さまざまな地域においてNPOや地域住民と連携した環境保全活動・環境学習を実施している。村上市高根地区では、共存の森と連携して、平成22年から活動を実施している。

以来、10〜20名程度が年4回来村している。5月は田植え、6月は運動会、7月は道普請、10月は稲刈りに参加している。社員の中には、豪雪の冬も欠かさず毎月来ている人もいて、「自然も素晴らしいが、人が温かい。民宿で出してくれる郷土料理と地酒は絶品です。冬には2m以上の雪が降る豪雪地ですが、屋根の上の雪下ろしは素人には無理と言われ、道路の雪かきを手伝います」と語る。

ほぼ毎回参加している社員の子供は、高根フロンティアクラブ会長遠山政好さんのお孫さんに会いに来ており、一年ぶりに再会した2人は早速手をつないで駆けたり折り紙等で遊んでいる。新潟県在住の若手社員の中には「実家は農家だけれど、田植えを手伝ったことがないので楽しみ」という人もいた。高根は、活動場所という以上に、第二のふるさとの存在であるように見える。

午後2時から始まったオリエンテーションでは、まず高根区長の相馬忠男さんが「若い人が来て田植えや運動会に参加してくれるこ



▲高根フロンティアクラブ遠山会長が田植えのコツを説明



▲キャノングループの若者たち

▼共存の森の女子大生たち



▲毎月来村しているご夫妻



▶おやつのおむすびを食べる参加した親子
◀親睦会前に活動の在り方について述べる共存の森事務局の神谷さん

とが、集落にとつてとても嬉しい。我々も今日のために準備してきました。夜は郷土料理と地酒を楽しみましょう」と挨拶。続いて高根フロンティアクラブ会長の遠山政好さんが挨拶をした後、稲作講座の講師・遠山眞佐美さんより高根米が特Aクラスの米として認定されたことを報告、会場は拍手に包まれた。「標高300mという寒暖差や豊富な清水、有機質な土壌作りが美味しい米を育てています。稲作農家は70軒だが、専業農家は1軒だけ、皆土日に一生懸命働いて頑張っています」と語り、田植えの手順を説明した。

田植え——泥田で子どもに帰る

そのあと、共存の森事務局の神谷由衣さんがスケジュールや宿泊施設等の割り振り等を説明して解散、各人が車に分乗して田植えをする田圃へ向かった。

田植えをする田圃は仲畑という団地の棚田2枚で、共存の森の学生たちが農家の方々の指導を受けながら田の表面にラインを引く。苗が用意され、「苗は2、3本ずつ植えて」と

遠山会長が見本を示す。

田靴を用意してきている人も多く、左右に分かれて一斉に田植えが始まった。素足を入れた時の感触や足が泥に捕られて移動しにくい等で、あちこちから悲鳴に近い声がかかる。神谷さんも女子大生の中に入って慣れた手つきで作業。畔からは地元の人

が田植えをする人に苗の束を正確に投げるが、キャッチできなくて転倒する女性もいて、また笑い声。毎年参加しているキャノングループ参加者は黙々と手際よく植え、初参加者はまっ白い脛を泥に浸けながら「結構大変な作業で、農家の苦労がよくわかる」と言いながらも、次第



▶おやつのおむすびを食べる参加した親子
◀親睦会前に活動の在り方について述べる共存の森事務局の神谷さん

にスピードを上げていった。

多勢の作業で一枚目の田植えは間もなく終了、もう一枚の田へ移動した。

指導していた遠山さんは「田植えも機械化されて楽になりましたが、苗が定植した頃に3、4列ごとに20cm程度の溝を掘る。これが一番の重労働ですわ」と語る。田んぼの水はけをよくするために欠かせない作業のようだが、米の販路については「個人のお客さんが多くなったが、半分はJAを通して販売している。その場合は他の新潟米と一緒に、価格も安い。高根米をブランド化して直売するシステムを強化していきたいと思っています」と言っていた。

2時間ほどで田植え作業が終了、田の脇を流れる水路で手足を洗う。そこへおやつとしてお母さんたちが用意した高根米のおむすびが届けられた。作業あとの銀シャリと漬物の美味しいこと、皆の顔が子どものような笑顔で溢れている。

「キャノングループ柵田のふるさとづくり」看板の前に一同集合して記念撮影したあとは、「みどりの里」温泉等について入浴・着替え、6時30分から区民会館で親睦会（夕食会）がはじまる。

午後5時、区民会館の厨房では、この日のために用意された山菜やアスパラガス、新鮮野菜等が並び、IRORIから派遣されてきた料理通のお母さんたちが天ぷらやサラダ、煮物等を調理している。田植えに参加した女性たちも手伝って沢山の料理と新潟銘酒がテーブルに並んだ。

宴会の前に共存の森の神谷さんが、スクリ

ーンを留意して「なぜ高根に通うか」と交流活動の必要性を語った。

「高根は自然がきれいで美味しい米の産地です。でも子供は東京へ出ていき農家は高齢化している。耕作放棄地も増え、猿の被害も拡大している。空き家も増えてきているので、能登谷夫妻のような若い人に移住してきて欲しいが、雇用の場は少ない」と現状等を説明したあと、「子供たちの未来に、美しく緑豊かなふるさとを残していくために、高根の良さをアピールする、空き家を活用して交流や移住してくる人を増やす、ワークシヨップを設けて我々の会が地元と共存する流れを作るなど、わたし達に出来ることは何かを考えていきたい」と語った。

地元の子供らとひまわりの種蒔き

翌日も快晴、真夏日のような暑さである。今日は天蓋高原でひまわりの種を蒔く作業を行う。標高300mの見晴らしのいい草原地帯にあり、周辺はワラビ等の山菜の宝庫。ひまわりは1.6haの広大な畑に時かれ、約5万本の花を咲かせる。夏の高原を彩る風物詩として親しまれ、「天蓋高原夏祭り」も開催される。

住民や子供会の親子が種蒔きしているが、活動当初から共存の森とキャノングループも作業を手伝ってきた。

畑ではすでに高根に住む小学生の児童と保護者が種を蒔いている。鳥に食べられないように紫色に染めた種を、盛り上げた畝に足の幅

間隔で穴を開けて入れ、軽く土を被せる。畝の前に作業した子供の名札が掲げられるので、付添いの保護者が入念にチェックをしている。会の人たちは別の畑で種蒔きを開始。多勢だから作業は早い。

畑の奥は「木漏れ日の雑木林」と看板が立つ保養林で、ブナやホオノキ、カエデの巨樹が枝を張り、地面には山椿が茂っている。その奥にはかつて田圃だったところがビオトープになり、子供たちがイモリやギンヤンマを取って野生を味わう池になっている。やってきた参加者の子供たちに地元の男子児童がイモリを手渡す粋な交流も見られた。

ひまわりの種まきは11時には終了、能登谷夫妻が運んできた冷えた飲料水が配られ、それを飲みながら、高根フロンティアクラブの人が解散の挨拶をして「再会」を誓った。

畑の上の方の草原にはかつて共存の森も参加して植樹したブナが新芽を広げて育っている。次に来村した時は下草刈りが行われるだろう。

文／浅井登美子
写真／小林恵

▼ひまわりの種蒔きをする参加者たち



▼地元の親子たちも総出で種蒔き



- 高根区民会館 ☎0254-73-1013
- NPO法人共存の森ネットワーク事務局 ☎03-6432-6580
<http://www.kyouzon.org/>
- キャノングループ「未来につなぐふるさとプロジェクト」
canon.jp/furusato-p

▶午後4時、下校してきた4、5年生

授業を終えて「だいだらぼっち」へ帰ってきた子供たちは、キッチン兼リビングルームで飲物と菓子でひと息ついた後、それぞれが自分の仕事（遊び）へ向かう。当番の子供はスタッフと一緒に鮎を三枚おろしにしたりみそ汁の支度、その間に脇のテーブルで宿題を始める子も。外では薪割りや風呂焚き。自転車を乗り回している男子、ピアノを弾く女子、編み物を始める子——いつもの充実した子供たちの時間。



長野県
やすおかむら
泰阜村

450人の子供たちの第二の故郷 暮らしの学校[だいだらぼっち] NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター

グリーンウッド自然体験教育センター運営の「だいだらぼっち」には現在18名の小中学生が山村留学しており、17名の職員・研修生が子供たちの生活を支えている。30年間子供たちを見守ってきたスタッフ、かつてここに留学し現在イターンして山で工房を営む工芸家、保護者会のために都市から出かけてきた母親等、短時間だが心ときめく出会いがあった。子供って凄い、コンビがない過疎の村がひかり輝いている。

母屋、工房、実のなる木々、ふれあい施設

南信州、名勝天竜峡の先、天竜川とJR飯田線が寄り添って南北に連なる谷合。その東部河岸段丘に広がる中山間地が泰阜村。人口1700人の小さな村だが、合併せず住民の自治精神を貫いて独自の風土を築いた村である。丘の上の新築された小中学校を過ぎて坂道を登っていくと、グリーンウッド自然体験教育センター（以下「グリーンウッド」）が経営する様々な施設がある。「だいだらぼっち」には十数年前に2度来ているが、すっかり様変わりし、木々が茂る広場には沢山のユニークな木造建物が出来、子供が生活する母屋「だいだらぼっち」も改装されている。途中には村営住宅が何棟も立ち、その先には地域交流センターも出来た。北部の役場地区に次ぐ村のもう一つの中心街という雰囲気である。

午前10時到着。子供たちは学校へ行っているためセンターは静かだが、一人の女性がハンガーにかけた沢山の洗濯物を見回っている。思い出した、梶さち子さんだ。「だいだらぼっち」が開校した頃から山村留學生と生活を共にしてきた母親的存在だ。「あの頃植えた木はすっかり伸びてたくさんの実をつけています」という。梅、栗、桃等の木が茂り、桃が食べごろを迎えている。梶さんのお話は後



◀左/だいだらぼっちの建物
右/山の天っ辺あたりからみた泰阜村



▲広い居間で語る斎藤新事務局長



▲30年間子供世話をしてきた梶さち子さん

にして、まずグリーンウッド事務局長の斎藤新さんにお会いした。

いまから30年前、子供たちの自主性や個性を生かす教育をめざして自然体験教室や山村留学を行ってきたグリーンウッドは平成13年にNPO法人化した。活動を継続していくためには職員の給与を安定化し優れた人材を確保することが必要。法人化に当たっては7割はグリーンウッドの自主財源で行い、その後施設のある土地や、自家用野菜を作る畑や体験学習用の水田も購入した。敷地内には、子供とスタッフが生活を共にする母屋「だいだらぼっち」を中心に、日本一大きいと自慢する五右衛門風呂、トイレ棟、年数回皆の作品を焼く本格的な登り窯と小窯があり、さらに子供たちの家族や客が宿泊する「六軒長屋」、地区の人も活用する憩いの家「リーダーズカ



◀スタッフは子供が登校したあとは各種報告や夏キャンプの打ち合わせ等で忙しい

子供たちが決めて実行する

「レッジ」、事務棟等がある。

これらの施設は卒業生や陶芸家・工芸家も多数利用しており、子供の中には腕前を上げて、プロをめざすケースもある。

目立つのは薪。「毎日炊く風呂も窯も薪を使い、冬はマイナス10度になりますが、室内の暖房も薪ストーブ。だから薪が欠かせませんが、今は薪を手に入れるにも苦労したようですが、今は間伐材が沢山届きます。チェーンソーで伐る以外の薪割りは子供の仕事、それでは足りないのでスタッフも毎日やっていますが」と斎藤さん。当然ながらテレビもゲーム機もなく、携帯電話は禁止だが、ラジオやピアノ、ギター、ドラム等は揃っており、スタッフらと演奏会を開くこともあるという。

キャンプに参加する子供は毎年1000人を超え、今までに山村留学した児童生徒は450名。今は小学4年生から中学3年生まで18名が留学しており、本人の意思で2〜3年間続けて留学している中学生も数人いる。

斎藤新さん(40)が泰阜村に移住し、グリーンウッドのスタッフになったのは10年前のこと。東京で児童図書の仕事をしていた時、子供に関する知識を深めたいと、グリーンウッドが主催する夏休みのキャンプに参加した。1ヵ月半のキャンプで大勢の子供や主催者たちの教育理念にふれ、移住

▼学校から帰るとスタッフにいろいろ報告しながらおやつをいただく



▼薪で風呂を炊く女の子とスタッフ



▼本格的な登り窯。子供の器もこの釜で焼く



を決めたという。その後グリーンウッドで出会った女性と結婚した。斎藤さんの移住・結婚を機に、村でも中古村営住宅を改築・新築した。村長立ち合いで結婚式を挙げることができ、いまは2人の子供のお父さんでもある。

キャンプは、子供が企画してやりたいことをやるフリープログラムで、キャンプを終えた子供や親たちが、こんなキャンプを一年間やりたいと言うようになった。そ

▼ソーラを飾り風に配した宿泊棟





▲ピアノがとても上手な小5年生



▲台所仕事の合間に宿題をする



▲7月の予定表をスタッフと制作する。奥にはミニ舞台がありドラム等の楽器が

「森の幼稚園」も人気で、小中学校の野外活動にグリーンウッドのスタッフが同行してほしいという学校の要請も増えてきている。

「たまに都市等に住むお母さんが、うちの子供が登校しなくなったので山村留学させたいと悲痛な声で電話してきます。そんな時は、子供はどう思っているのかと聞き、あくまでも子供自身が来た

いと思うことを伝え、場合によってはキャンプへの参加を呼びかけます」と斎藤さんは言う。山村留学する子供には「持つてくるのは本人のやる気、持つてこなくていいのは親の期待です」と言うことも。

日差しの中で洗濯物を見回ったり、子供が作り出して放置した工作所の片付けを黙々としている梶さち子さん（現グリーンウッド会長）。「ほんとは子供がやらなければならいんですが、学校での授業が忙しくて帰りも遅くなるから、少しお手伝いします」とにっこり

25歳、東京で幼稚園の教員を辞めた時、「だいたらぼっち」を設立するため、そのスタッフになつて欲しいと頼まれ、ここへ来ることになつたという。以来30年間、グリーンウッドがめざす子供主体の自由教育を実践し、子供の安全確保や地域との橋渡しを先頭に立つて行ってきた。

村内に留学児童の施設を作るときは、村民

うなるとキャンプという非日常的な活動は、「暮らし」という日常性を帯びた方向、山村留学へと進展していく。そのためには施設建設や食事・福祉関連の取り組み等々様々な制約があつたが、斎藤さんは「子供が主役という基本は変わらない。根っこ教育というのでしようか、子供が自分で考えて実行すること、暮らしから学ぶ教育です」と言う。

今ではグリーンウッド主催のキャンプは夏と冬の2回行われ、とくに「山賊キャンプ」と呼ばれる夏休み1ヵ月間の野外キャンプには1200名の親子や研修の大学生が参加、村は大賑わいとなる。その時期に併せて農家は野菜や果物を栽培するほどだとか。夏休みや冬休みには山村留学する児童が帰宅する「だいたらぼっち」の家も使つて行われる。

最近では村の保育園児も参加して実施される

から「村の子供が都会の悪い血に染まる」と猛反対されたが、何度も懇談会を開き「留学してくる子は泰阜の自然が好きなごく普通の子供たち。私もここに嫁ぐつもりで来ました」と説得したという。山村留学は当初予定した20名が4名になつたが、日本集落に土地が決まり、宿泊施設の建築には廃材や電電公社（当時）の電柱も使つてスタッフと子供、地域の人も協力して行われた。子供たちが来る日も来る日も建設現場で汗を流して働くのを地元の人々は驚嘆して眺めたという。

地域のお年寄りは登下校する子供たちを見

▼台所で夕食の支度をするスタッフの森さんと当番の子供たち。保護者から新鮮な鰯がたっぷり届いたため、三枚おろしにして揚げる準備。右は子供が作ったマイ皿





▲原澤さんを訪ねてきた児玉さん(左)と工芸作家原澤さん
▼美味しそう。泰阜小学校4年生の給食風景



「主人も私も東京の生まれ育ちですが、都会暮らしは

したという。

護者会が開かれるので来村

年)のお母さんで、明日保

っている児玉萌さん(中学3

そのテーブルで彫刻刀を使

ってスプーンを制作してい

る女性がいる。山村留学し

子が「いだいだらぼっち」の

居間にあったが、木の風合

いを生かした感触は温かい

ぬくもりにあふれている。

遙か眼下に村を望む庭先

2年前にインターンし、グリー

ンウッドにもよく訪れる。原

澤さんの制作した手彫りの椅

ぶことが夢でした」

それが夢でした」

それが夢でした」

「泰阜に高校がないのは残念ですが、ここを

出て社会性を身に付けることも大切です。泰

阜村を第二のふるさとにして訪ねてくれ、キ

ャンプにも参加してくれればと思います」と

斎藤さんは言っていた。

そろそろ夕暮れ時、スタッフの手伝いで子

供が調理したアジフライも出来上がり、テー

ブルにはマイ皿(自作した陶芸品)が並べら

れていた。

文/浅井登美子 写真/小林恵

「親は寂しい思いもしましたが、

それが親の覚悟で自分たちの生活

を充実出来ました。娘の集中力や忍耐強さに

は脱帽で、都会の塾などに通っていたら身に

つかなかったでしょうね」と児玉さんは言う。

夫も品川から八ヶ岳に移住、萌さんは北

杜市の高校へ入学する予定とか。下山したら

萌さんに会いたいと思ったが、テニスの練習

で帰宅が遅いため、かなわなかった。

●NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター
☎0260-25-2851
http://www.greenwood.or.jp

▶薪割りをする少年たち
奥・左手が浴室棟



守り「今日の〇〇君は顔色が悪い」と心配したり、「うちの田圃に入った奴は誰だ」と怒鳴り込んだりしながら、孫のように接している。昼食時に小学校を訪ね、学校給食を拝見すると共に、宮島忍校長先生にお話を聞いた。今年4月に赴任してきたばかりだというのが「山村留学の子供は親と離れて来ているのに、皆とても明るく活発です。幼稚園から小中学校まで同じ仲間と過ごす村の子供たちにとつて、他所から来た子供はとていい刺激です。田舎の子供より自然や農家の仕事に関心を持っている子供が多いですね」と語った。

現在泰阜村の小中学生は80名、中学生は50名。うち約20名が山村留学生で、今後さらに貴重な存在になるだろう。

なお泰阜小学校には全国でも珍しい村立学校美術館があり、地元出身の彫刻家、画家、書家の作品を展示している。厳しい山村だったが文化教育に熱心に取り組み、多くの作家

を生んだ。その風土と誇りが質の高い美術館に反映されている。

「いだいだらぼっち」に留学後、東京芸術大学彫刻科を卒業して工芸家として活動する原澤茜さん(27)の工房を標高800mの山間集落に訪ねた。林業で暮らしてきた集落だが、今は廃屋が増えている。原澤さんはその一軒を借りて木工品の制作に取り組んでいる。

「中学の時2年間ここに留学しました。自然の中を走り回り陶芸や木工もたくさん出来たことが幸いしました。一学期に3回も陶芸が出来、自分でモノを作ることを体得した。実は千葉県柏市ですが、泰阜村に戻って自然の中で暮らしながら作品を作ったり子供と遊ぶことが夢でした」

2年前にインターンし、グリーンウッドにもよく訪れる。原澤さんの制作した手彫りの椅子が「いだいだらぼっち」の子が「いだいだらぼっち」の居間にあったが、木の風合いを生かした感触は温かいぬくもりにあふれている。

第二の故郷で創作・交流活動



奄美大島他で大学生が「島キャン」 島の魅力発見とインターンシップ（就労体験）

㈱カケハシスカイソリューションズが主催して昨年（平成26年）からはじめた、学生が島でインターンシップする「島キャン」活動が話題になっている。

昨年夏の島キャンには168名の学生が奄美大島等7島へ、続く今年春の島キャンでは喜界島、徳之島、島後・隠岐の島町も加わり10島に60名が参加、20カ所の事業所で働いた。受け入れた企業や団体はもとより、就労した学生にも好評で、島の魅力や就労体験を発信する学生のWEBは1124サイトに達している。

2年目となる2015夏キャンには、すでに200名の学生が島行きの準備をはじめている。

「島キャン」とは——

㈱カケハシスカイソリューションズ（以下「カケハシ」と略）によれば、島キャンとは、学生が島で働くことで、島を活性化する新しいインターンシップの愛称。離島が現在も未来も若者の集まる場所になること。島へきた若者は、その美しくも厳しい自然環境や独自の異文化を知り、さらに島の事業所や施設等で働くことで、島人との交流が深まり、汗することの価値を学ぶことができる。

島には、それぞれに魅力的な地場産業や伝統技術があるが、現在は若

島キャンの舞台として人気の奄美諸島



者の流出で高齢化や人口減少が大幅に進んでいる。離島の事業所は新規人材の採用が難しく、繁忙期のマンパワー不足は深刻だ。

一方の学生は、就職活動は増加、情報の受信は高まっているものの、対人コミュニケーション力と実体験が不足し、就労意識も低下していると言われる。

カケハシでは、そんな離島と学生を結びつけることで、離島は島おこしに必要な産業維持のために短期的なマンパワーを確保、それを契機にして長期的な人口増加へ向けて取り組み、島の存在や観光産業のPR機会を創出することができる。

学生にとっては、脱情報(データ)、脱大都市圏文化で、活動範囲の拡大、体験・体感・ふれあいを離島で習得できる。「インターンシップで訪れた離島が、学生の第二の故郷になつてほしい」というのがカケハシの「島キャン」の狙いでもある。

カケハシ スカイソリューションズ(本社/東京飯田橋セントラルプラザ)は、「企業と人の架け橋となる」事業をめざして平成23年に中川智尚氏が設立した会社で、人材採用に関するサービス、組織活性化、マーケティング・プロモーション等の事業を行っている。

中小企業から大手企業まで採用課題を抱える顧客の人材確保や社員教育サービス等が設立の大きな目的でもある。地域活性化に関心があつた中川社長は、特に離島が人手不足で苦闘していることを実感し、島キャン活動をカケハシの地域活性化事業として行っていくことに踏み切った。

同社広報企画局の山田佳那さんは「学生は

離島に関心があり、島の異文化に触れたいと思つています。就労もいとません。そのため、受け入れてくれる市町村や事業所が必要です。私たちは何度も島へ出かけ、事業所の方に活動の趣旨を説明し、多くの賛同を得ることができました」と語る。

2014年6月から登録開始、8月末までの3カ月間に1065名の学生が会員登録し、306名が参加希望した。参加学生は早稲田大23、東洋大17、慶応義塾大・日本大各16名他、首都圏の一流大学生も多く見られる。

若者と島人が生活を共にした その感動を発信する

2014年夏の島キャンに学生を受け入れた事業所は、北海道礼文島の水産加工会社1社、隠岐の島海士町の子どもキャンプの手伝い等の2社を除いて、奄美大島諸島が舞台となった。奄美市ではホテルやペンション、観光施設等16社、沖永良部島では7社、加計呂麻島4社、与論島9社が学生の受入れ先となった。

島キャンは学生のインターンシップ活動であるため、旅費も滞在諸経費も学生が自己負担する。学生を受け入れる事業所は学生に賃金や宿泊施設を提供する必要はない。しかし山田さんから頂いたインターン先事業所の一覧を見ると、宿泊施設を無償提供したり、割安で民宿を世話したり、食事や島内の交通費を補助する等のサービスが各社の判断で行われている。

仕事の内容を奄美市の例で見ると、ホテル等での補助仕事以外に、マングローブ原

生林でのガイド、黒糖焼酎製造会社での補助作業、島バス会社での切符販売など、都市では体験できないような仕事も多い。役場での清掃業務やイベント手伝いもある。

受け入れた事業所や自治体の感想は大変好評で、「学生は島のために何ができるかと熱心で、沢山のアイデアをもらった」「素直で良い子ばかり、社会人になっても遊びに来てほしい」「単純な作業にもよく対応してくれ勤労意欲の高さに驚いた」「学生が来たことで島に活気が出た。小中学生だけでなくお年寄り



▲百根根の仕分け



▲塩づくりのための薪集め



▲奄美の美しい海水から作る「さんご塩」の製作を手伝う学生たち
◀休みの日は別の島に遊びに行くことも

も大喜びでいい刺激となった。ぜひ継続して島キャンを受け入れたい」等々。

さらに、学生が島体験をフェイスブックで情報発信することで、島のPRにもなり、島外から多くの反響が寄せられたという。

インターン生が発信した沢山の情報をみると、美しい写真と共に、島の魅力や島人の暖かさ、住民が島の事を思う気持ち、仕事への誇りを感じたこと、これからも島を訪ねたい、第二の故郷にしたい、多くの仲間と島の素晴らしさを伝えたい等の声が満載されている。

2015年の夏の島キャンには210名が参加

二度目の夏を迎える島キャンの説明会は、カケハシの東京本部と大阪支社と福岡で延べ15回実施され、参加希望の学生が毎回40名以上会場を埋めた。本誌も出かけてみたが、参加予定者は女子学生が約6割を占めている。聞いてみると「珊瑚礁に関心があるので、仕事の合間に海に潜りたい」「島の動植物を観察したい」と目的も明確だ。

インターン先事業所一覧をみると、10島から50社の受け入れがあり、「でぼら」45号で取材した隠岐国学習センターからも2名の教科指導員を募集している。受け入れ期間は2週間以上、人数も増えて5、6名を希望する事業所もある。

さらに、来てくれる学生に島を理解し感謝を伝えたいと、自治体によるいくつかの島キャン・サービスも始まった。

学生が何人か来る島では観光協会等の主催で、まず島の見学会や食事会が行われること

になった。加えて、奄美市では一人当たり1万円の旅費と宿泊費一泊2千円を10日間を上限に補助。沖永良部島は島キャンの名札を用意、バスや海水浴場が一日無料、島内のホテルや食堂、ダイビング等の割引サービスが受けられる等の特典を設けた。就労代を支払いたいという企業もある。

説明会では、昨年夏に与論島へ4週間出かけた大久保純一さんと、沖永良部島へ1週間行った宮川健太郎さんが感想を語った。大久保さんは観光関係の仕事を手伝ったが、船が着くまで2、3時間砂浜で待つという長時間のこと、島の人は酒に強いので肝臓を鍛えていくことを話し、会場を笑わせた。地域問題をテーマにしている宮川さんは台風のため実際には3日しか滞在できなかったことを悔やみ、2週間以上で行くこと、行く前に島について徹底的に調べておくこと等を提案した。

説明会に参加した学生たちは同席の他校の学生とすぐ親しくなり、島行きに目を輝かせている。そんな学生に向かってカケハシで島キャンを担当する田島遥菜さんは島経験が豊富で、「島キャンの心得」を語る。「ちよつと浮かれたり良識のない行動をすると、うわさはすぐ広がる」との注意も忘れない。

カケハシでは、参加者の両親宛便り、保険申し込み、安く行ける交通方法の一覧等も用意。説明会の後、学生は自分の行きたい島と希望する仕事を申し込んだ。

その後、カケハシの報告によると、2015年夏の島キャンには最終的に210名(7/27時点)の学生が参加することになったという。

文/浅井登美子 写真/カケハシ提供



▲2015年夏の島キャン説明会に集まった学生たち
▼学生と受け入れ事業者との交流会



▲島キャンH.P

●カケハシ スカイソリューションズ
☎0120-342-834
<http://www.kakehashi-skysol.co.jp>



農業の
プロを育成する
高校の取組み

正規授業の一環として蜜蜂を飼い、蜂蜜を採集し販売している広島県立油木高等学校産業ビジネス科の「ミツバチプロジェクト」は、標高約500mの広島県神石高原町にある。中山間地で高齢化率が44・95%になるため、地域の深刻な課題となっている耕作放棄地をなんとかしようと、5年前から放置されていた畑を整地し、レンゲなどミツバチの好む花を植えて活用することで地域貢献を

めざしている。3年前には、東日本大震災で被災地となった宮城県亘理町のイチゴ農家へハウスイチゴの交配用ミツバチを贈り喜ばれたことで、種バチを購入してミツバチを増やし、被災地の支援を継続している。梅雨の合間に行われたミツバチプロジェクトの授業を訪ね、蜜蜂の世話をする高校生の仕事ぶりを見せてもらった。

休耕地を花と蜜蜂の丘に 油木高校[ミツバチプロジェクト]

広島県神石高原町

「農業に関心ある若者に」

休み時間に校庭を歩いていると、出会う生徒の誰もが立ち止まって正面を向き、丁寧なお辞儀で「こんにちは」と挨拶をしてくれる。最初は、その丁寧さに戸惑うほどだが、清々しく気持ちの良い生徒たちの印象は、学校の教育方針と地域が育んできた校風なのだろう。

旧油木町商店街の一角にある広島県立油木高等学校(以下油木高校)は、普通科と産業ビジネス科の2学科がある。今回訪ねたミツバチプロジェクトは、産業ビジネス科の「地域環境保全類型」コースの授業として行われ、他にナマズの養殖や炭焼き、魚釣り、グリーンツーリズム、キノコ栽培などのプロジェクトがあり、生徒がそれぞれを選択受講している。毎週火曜日と金曜日の午後1時25分から始まる2時限が、総合実習と呼ばれる各プロジェクトの授業時間

▼ショートホームルーム



▼養蜂場の作業室で作業服に着替える



養蜂に必要な「内検」作業

だ。昼休みのザワザワとした時間が終わると、校門の向い側にある作業準備室に生徒たちが集まってきた。ミツバチプロジェクトは「畜産研究班」と呼ばれるチームで、3年生28名中8名が選択している。

3年生の担任でありミツバチプロジェクトを指導する宮本紀子先生(41)が、「今年の3年生は、農業大好きクラスなので、28名人のうち10名くらいは農業するぞって腹を括って

ますね。でも、残念ながら卒業後にミツバチをやりたいと言う子はいないんですよ」と、少し残念そうだが、農業に関心を示す生徒たちを暖かく見守って、一人前の農業人として成長してほしいと願っているのが伝わってくる。

「草刈り機を使えるのは当たり前じゃない」と言う地域ですからね。全国に草刈り機を使える高校生がどれだけおられますか」

と声に出して蜜蜂に挨拶している。ワーンという蜜蜂の羽音を聞くと、「わあっ、今日、元氣じゃん」と嬉しそうに声を上げた。長雨が続いた後の久し振りの雨上がり。蜜蜂たちも巣箱を飛び出し、餌にする花粉や花蜜を採ってきたばかりで活力に溢れていた。

渡邊翔平さん(18)は、いつもは首に巻いているタオルを忘れて面布を付けたようだ。「怖え、怖え、今日、怖いよ。タオルないと、こんなに怖いのかよ」と、蜜蜂に刺されるのではと気になって、内検作業に身が入らない様子だ。

生徒たちは作業準備室で長靴を履き、作業服に着替えて養蜂場へ向かった。養蜂場は牛舎のある丘の上。養蜂場の作業室で、全員が面布(蜂に刺されないために頭部を網で覆う養蜂具)と手袋を付けて、いよいよ巣箱へ。この日の作業は「内検」といって、巣箱の中の蜂の様子を観察し、蜜を採集しているか、餌は足りているか、女王蜂が生まれる王台は出来ていないか、ダニは発生していないか等、一週間に一度は行わなければならない養蜂の基本的作業だ。

内検の際、煙を吹きかけて蜜蜂を溫和しくさせるための燻煙器を準備するのは、女子生徒の役目となっているようだ。

木陰で、燻煙器に火種を入れていた今岡美咲希さん(18)は、「1年生の時に東北支援に行つて衝撃を受け、プロジェクトは蜜蜂を選ぼうと思つて。道具の名前とか巣箱で何をするとか、なかなか分からない」と、養蜂の細々とした作業内容に少々当惑気味だが、男子生徒の「(燻煙器の)火が消えちゃった。もう一度火を付けて」という要望に嬉々として応えていた。

実際に巣箱の蓋を開けて巣枠を取り出し、内検するのは男子生徒たち。長田真樹さん(18)は、「こんなに



▲巣枠にできていた王台を潰す



▲燻煙器を準備する馬屋原さん(左)と今岡さん
▼内検をする生徒たち。左端は宮本先生



ミツバチプロジェクトが管理するのは、継ぎ箱(2段重ねの巣箱)が12個。蜜を溜めるのは上段巣箱の巣房である。雨が溜まったため、採蜜をするほどは蜂蜜が溜まっていない。

宮本先生が「王台が出来ていたら教えてよ」と、生徒に声を掛ける。王台が出来ていて、放置すれば分封(女王蜂が働き蜂を連れて他の群れを作る)が起る可能性があるため、注意しなければならぬからだ。

生徒たちは2人1組になって内検を進めているが、蜜蜂の様子に見とれて時間が掛かっている。宮本先生の声が再び飛ぶ。「真海くんところは、1回に時間が掛かりすぎやっつて」産業プロジェクトの授業時間は、あつという間に過ぎていく。時間内に作



▶内検をする真海さん(右)と入江さん
▼油木百彩館で売られていた蜂蜜



業を終えなければ、巣箱を放置することはできない。宮本先生は焦っているのだ。

真海拓人さん(17)は「蜜蜂の仕事って楽しそうだったから」と、ミツバチプロジェクトを選択した。生き物好きなのだ。だから、内検の時に

蜜蜂を見つめてしまうのだろう。

「蜂蜜が美味しいって言うてくれるのが良いなと思って、ミツバチプロジェクトを選びました。メンバーも気持ちいいので楽しいです」と、充実した授業になっているようだ。

入江彰浩さん(17)は蜂蜜を絞っている場面をビデオで見て、「楽しそう」とミツバチプロジェクトを選択した。では、実際の授業はどうなのだろうか。「内検で女王蜂を探している時が面白い」と、蜜蜂の生態にも関心を示し、生き物好きと思っただけで、卒業後は「自動車の整備士になります」と畑違いの道を選んだ。

ビジネス化できる農業を

宮本先生は「儲かる農業を伝える」ことが、産業ビジネス科の目標だと言う。「どんな動物を飼ったらお金になるのかをやってきましたが、その結果、蜜蜂が一番お金に近いんです。蜂蜜は、夢の食品だったんですよ。腐らない、カビが生えないと言っているのは、感動的ですよね。高校で6次産業化も視野に入れて、ほら儲かるじゃんと言ってるやうなんです」

この日の授業で採蜜を出来るかと期待したが、ミツバチプロジェクトは内検で終わってしまった。生徒たちは放課後、部活や数日後に迫っている文化祭の準備に追われているのだ。3年生の教室では文化祭の準備

が始まった。売店の看板造りとステージで披露する歌の練習。

看板にペンキを塗っていた長田さんが時計を見て大きな声を出した。「やべえ、バスに間に合わない。家は家族経営で農業やってます。忙しいんで手伝わないと……」。

鞆を脇に抱えて教室を飛び出して行った。

部活が終わって教室に帰ってきた真海さんは、同じミツバチプロジェクト仲間山元望さん(17)や柿崎留依さん(18)たちと一緒に歌の練習を始めた。真海さんはミツバチプロジェクトの授業が終わる直前に蜜蜂に刺されたと騒いでいたが、もうケロツとしている。「仕事は普通の勤めをしますが、定年退職したら養蜂をやってみようかなと思ってます」と、ミツバチプロジェクトを通じて養蜂の面白さを感じているのだ。

旧油木町商店街の入り口にある「油木百彩館」を訪ねると、「油木高校はちみつ」と貼り紙があり油木高校産業ビジネス科の「里山の恵み蜂蜜」が1000グラム800円で販売されていた。他の蜂蜜家が採った蜂蜜も売られているが、産業ビジネス科の蜂蜜は2割ほ

ど割高だ。四丹嘉彦店長(71)は、「高校が作ったんだから本物中の本物だと評判が良くて、高い値段に拘らさず売れてね。買い占めされるから、いっぺんに出さないようにしています」と、高い評価である。

耕作放棄地を整地して活用することや東日本大震災の被災地を支援することも立派な地域貢献だが、農業や林業が主産業の中山間地で、実践的な授業を行い農業に関心を寄せる高校生が誕生し、その高校生たちの活動が地域に刺激を与えている。そのことが何よりも地域貢献なのだと思う。

写真・文/芥川仁

▼作業を終えて。ミツバチプロジェクトの生徒たち



▶佐々木さんのリンゴ園で摘花作業を学ぶ生徒たち

青森県南部、岩手県との県境にある人口約2万人の南部町の基幹産業は農業だ。標高615mの名久井岳山麓の富んだ地形と、町の中央を流れる馬淵川がもたらす地味肥沃な土壌を生かし、果樹栽培が盛んに行われてきた。サクランボやリンゴのほかブドウや洋梨、桃、梅など、南部町では数多くの果樹が栽培されているが、なかでも特産品のサクランボの生産量は、青森県一を



農業のプロを育成する高校の取組み

誇る。この果物の町で、町民から愛されているのが青森県立名久井農業高等学校だ。青森県三八地方唯一の農業高校として昭和19年に創設されて以来、優れた農業の担い手を育成してきた伝統校である。現在、町内で活動する農家の多くがこの農業高校の卒業生という。それだけに地域との結びつきが強い。援農する生徒の一日を取材した。

地域の農業と共に 名久井農業高校の農家支援活動

なんぶちよう
青森県南部町

1年生の農業支援活動

午前8時。名久井地区を望む小高い丘に建つ青森県立名久井農業高等学校(以下名久井農業高校)に生徒たちが元気な挨拶とともに登校してきた。今日は、園芸科学科の新1年生が地域の農家で実際の農作業を体験する農業支援活動を行う日となっている。1年生が援農活動を行うのは今日が初めて。生徒たちの心境としては、「どういう作業になるのかと楽しみ半分、不安半分です」と、やや緊張気味だった。

作業着に着替えた1年生が外に出てくると、そこで待っていたのは、町内の農家のみなさん。サクランボやリンゴなど、果樹栽培を行っている農家を中心となっているメンバーだ。



予定であれば、リンゴの樹の授粉作業が今回の作業の中心となるはずだったが、今年は4月後半から5月初旬の気温が高かったために、開花時期が早まり、援農活動の前に授粉時期が終わってしまっていた。そのため、今日は、結実数をコントロールするための摘花作業を中心に行うことになった。「今日をはじめでの農業支援活動ですがよろしくお願いします」と生徒

上/援農活動授業に出発する名久井農業高校1年生
下/生徒を待つ農家の人たち。グループに分かれて農家で実習体験する

代表から受け入れ農家への挨拶が終ると、4〜5名程度の班に分かれて受け入れ先の農家へと出発。いよいよ、作業開始となった。

地元農家で農業の現場を学ぶ

園芸科学科1年生の農業支援活動の様子を見るために伺ったのが、受け入れ10年目になる佐々木幸雄さんのリンゴ園。今回は4名の女子生徒たちがシナノスイートの摘花作業を行っていた。

伝統的に農家の担い手としての生徒が多い名久井農業高校だが、近年は農家以外の家庭で育った生徒たちの割合も増えてきたという。そのため、実際の農作業体験のない生徒も少なくない。そこで、佐々木さんは生徒たちに、品種の説明をはじめ、摘花作業の意味、作業の進め方、良いリンゴを作る方法など、これから

行う摘花作業について、実際に手を動かしながら詳しくレクチャーしようとして作業開始とした。

とはいえ、実際の作業が始まってみると、やはりまだ入学したばかりの1年生。ぎこちない手つきで作業も思うように進まない様子。

悪戦苦闘気味に一生懸命に作業を続ける生徒たちを見て、佐々木さんは「まあ、最初はこんなものですよ。でも、秋の収穫期にも援農作業があるんですが、そのときは別人になったかのようにしつかりと働いてくれるんですよ。やっぱり先生方の指導がいいんでしょうね。ひと夏でガラッと変わってね、しつかり作業ができる子たちになるんですよ」と笑って教えてくれた。

ちなみに佐々木さん自身も名久井農業高校の卒業生だ。

「わたしらの頃は、農家に生まれて、

その後継につて、しようがなく農業高校に進学する子が多かった。でも、今は違う。農家の後継とかじゃなくて、無数にある職種のなかで、わざわざ農業がやりたいって思う子が進学してきている。だから優秀な子も多い。そういう子がこれからの農業を担っていくんだから、頼もしいですよね」と手を動かす生徒たちを見ながら笑顔で話す佐々木さん。その言葉通り、近年はどうしても農業がしたいと、遠方から進学してくる子供たちも多くなっているという。

「さあ、10時だべ。一服すべえ」という佐々木さんの掛け声が白い花が咲き誇るリンゴ園に響き、楽しい団欒のひと時となった。

女の子らしく、大きくて花付きのいいリンゴの樹の下を選んでブルーシートを敷き、皆で車座になった。飲み物やお菓子を佐々木さんが差し出すと、そのお札にと、幼い頃から花を育てるのが大好きでこの学校に進学したという生徒が、休日を使って手作りしたという可愛いクッキーを振るまつた。

「いやあ、こういう女の子がリンゴを育てたら、オラ達なんか、もうかなわないよね。うめえリンゴ作るぞ、きつと」とご満悦の佐々木さんの笑顔が印象的。名久井農業高校の存在は、地元農家にとっても気持ち明るくさせる存在のようだ。

リンゴの木の下でしばしの歓談タイム。初めての摘花作業で少し緊張気味だった生徒たちの気持ちもほぐれてきたのだろうか。たわいもない話題でころころと笑いはじめた。

東日本大震災で絶滅危機のサクランボを救う活動

こうして授業カリキュラムの一環として農業支援活動を行う名久井農業高校だが、継続的に行っている地域貢献活動は実にバラエティーに富んでいる。

まず、地域の人たちが楽しみにしているのが野菜苗の販売会だ。これは生徒たちが栽培した野菜苗を格安で販売するというもので、校内で開かれる販売会当日には何百人もの人が訪れるという。自家菜園愛好家以外に、プロの農家までもが買い求めるにやってくるという盛況ぶり、初夏の南部町の風物詩的なイベントとなっている。

また、「緑育心」という名久井農業高校のモットーを実践するため、プランターを使つての街の緑化活動や、先進的な農業を実践する農業高校ならではの研究成果を活かし、植物を使つての公園の水質浄化を行うなどの環境保全活動も行なっている。さらに、農業の町、南部町の将来を考え、グリーンツーリズム商品の立ち上げ企画に携わるなど、その活動は



▲摘花作業は初めての生徒も多いが、熱心に学ぶ。作業のあとは爽やかな園内で昼食



絶滅寸前のサクラソウ。詳細なデータを取り、校内で保護栽培し、希少種の保存を行った

タ協賛)の受賞(2015年度第4回目)だろう。

震災からサクラソウを守る

この毎日地球未来賞を受賞したのは、名久井農業高校の園芸科学科と環境システム科による課題研究チーム「TEAM FLORA PHOTOGRAPHERS」の三陸沿岸種差海岸のサクラソウの保護活動だ。

活動のきっかけは、2011年の東日本大震災。巨大津波により、種差海岸の希少とされていたサクラソウ自生地が壊滅的な被害を受けたとの知らせを聞き、生き残ったサクラソウを救出することを目的に始まった。

震災から約1ヶ月後に本格的な調査に入ったチームは、塩分濃度等の土壌調査を行い、データ的にはサクラソウが絶滅の危機と確認。そこで県立公園である種差海岸を管理する県に向けて、絶滅の危機に備えて群生地以外でサクラソウを保存していくことを提案。その結果、県からの許可を得て、種差海岸のサクラソウ自生地の調査を進めながら、人工授粉

の末に採種を行い、校内で保護栽培を始めた。チームの努力の結果、これらの種は無事に成長していくこととなるが、生徒たちのサクラソウ自生地への思いはここで途切れることはなかった。

平成23年度には県に再び現地調査の許可を申請し、自生地の回復状況を探ることになった。このフィールド調査により、塩害を受けていた自生地が奇跡的な回復を遂げていることを確認。そのメカニズムについてもさまざまな角度から考察した。

また、回復状況の確認作業に併せて、希少種とされながらも調査の進んでいなかった種差海岸のサクラソウについても詳細なデータを取りながら研究を進めることに。その結果、種差海岸のサクラソウの貴重な学術データを集め、その全貌を明らかにすることにも成功した。この研究結果は、2013年11月に行われた第1回アジア県立公園会議にて発表され、多いに注目を集めたという。

「種差海岸は国定公園だったので、簡単に立ち入ることができない場所でした。許可申請など根気のいる作業もありましたが、生徒たちのサクラソウを守りたいという思いと、地元の環境を守っていきたいという思いが、未来賞を受賞するという結果につながったんだと思います」と、すでに卒業した生徒たちのサクラソウ

ウへの思いを話してくれたのが、チーム・フローラ・フォトニクスの4年間にわたる活動を指導した木村亨先生だ。

「名久井農業高校は71年前に地元の農家の人たちから切望されて生まれた高校だと聞いています。地域のために行動を起こすというのは、この学校の伝統の精神なのだと思います」と語る。

名久井農業高校の未来賞受賞は地元誌等でも大きく取り上げられるトピックスとなったが、この功績を生み出したのは、農業の今を学び、地域に支えられ、また支えるという名久井農業高校の豊かな学校教育の日常にあるように思えた。

文・写真／奥山淳志



農業の実践だけに留まらない。こうした様々な地域貢献や環境保全活動のなかで名久井農業高校の存在を広く知らしめたのが、地球規模の課題である食料、水、環境の分野で問題解決に取り組む個人や団体を対象とした毎日地球未来賞(毎日新聞社主催、内閣府などの後援、クボ



種差公園に蘇ったサクラソウ群生地(種差海岸の写真はすべて、名久井農業高校提供)

農業の
プロを育成する
高校の取組み

道北農業の未来を担う 北海道名寄産業高校

なよろし
北海道名寄市



▲牛舎での早期実習
◀午後の実習では牛の体を丁寧に洗浄する



今日の午前中の実習は、2・3年生によるトウモロコシの苗植え。実習の終わり近く、ビニールハウスから苗の植わったプランターを運び出

し、小さな建物の入口に並べる生徒たちに出会った。その建物は、月1回開店する学校のアンテナショップ「みずなら」で、生徒たちが運営を任され、生産加工した物品を販売している。

一面に水を張った田に初夏の日差しがまぶしい。柔らかな緑の苗がそよ風に揺れる6月、北海道名寄産業高等学校(以下北海道名寄産業高校)名農キャンパスを訪ねた。62haを超える校地内の農場には、田畑や牧草地が広がり、牛舎をはじめ、豚や鳥

の家畜舎や実習棟、ビニールハウスが点在。酪農科学科の生徒たちの専門科目の授業や実習の場である。

農業技術の修得から 特産品開発まで

近年、「北海道の米は美味しい」との評判が高い。寒冷地のため米は育たないと栽培が禁止されていた開拓当初から人々の稲作に対する熱意は強く、耐冷性の品種改良、栽培技術の進歩、そして収穫後の管理技術が向上した結果、北海道は今や、名実ともに日本一の米どころとなった。それでも、北海道北部は稲作に適さない。代わりに牛がのんびり牧草を食む酪農地帯が広がる。北海道名寄産業高等学校は、道北の稲作北限地帯でもち米の作付面積日本一の名寄市にあり、現在44名の高校生が酪農科学科で酪農や農業を学んでいる。

「みずなら」で、生徒たちが運営を任され、生産加工した物品を販売している。



上/光凌キャンパス
下/名農キャンパス農場



づくりを行って「います」と説明してくれたのは、食品加工担当の佐藤雅美先生。2年前に開発・製造した「ひまわりパン」は、市内の公益財団法人農業・環境・健康研究所の協力で凍結乾燥させたヒマワリの花を粉末化し、練りこんで作ったクッキー生地をパンにかぶせたもの。今年もヒマワリのパンやクッキーを作って、アンテナショップや地域のイベントなどで紹介する予定だという。



▲畑での実習
◀ヒマワリの苗をショップ入口に展示
▼羊かんづくり



約4km離れた光凌キャンパスで援業を受けていた1年生が、スクールバスで名農キャンパスに戻り、寮で昼食を取ったのち、午後の実習に臨んだ。3つのグループに分かれ、それぞれ羊かんづくり、アスパラの苗植え、牛舎で牛の世話をする。出来上がった羊かんはアンテナショップに並ぶ。あくまで実習主体なので作る量は限られるが、無添加でおいしい羊かんは、いつもあつという間に売り切れる。畑では、午前中に機械で掘り起こされた畝に、先生や実習助手の指導で、アスパラの苗を等間隔に植えていく。炎天下での作業だが、若さは暑さをはねとばすエネルギーがあるらしい。会話の中にも明るい笑顔が絶えない。

牛舎には、大きな牛たちと格闘している生徒たちがいた。牛の毛を刈る者、牛の体を丁寧に洗う者。長年の経験や知識を惜しみなく与えて指導してくれる先生や実習助手から、牛の行動や扱いを学び取る絶好の機会となる。こわごと牛を扱う生徒が多い中、扱いに慣れた女子生徒がいる。聞けば、牛200頭を育てる酪農家の娘さんだという。

午後の実習のあとは搾乳や清掃を行う放課後実習、次いで早朝実習が待っている。これらの実習は、1年から3年の縦割りで行ってきたグループ(5〜6名)が1週間交替で行い、基本的に上級生が下級生を指導する形で行われる。

「搾乳は機械で行いますが、まず手で搾ってから機械を取り付けます。生き物が相手ですから、機械や牛の扱いを間違えたいへん危険です。また搾乳した生乳は、実習で使う以外はホクレン(ホクレン農業協同組合連合会)が買い上げますので、衛生面で完璧を期さなければ商品にはならないばかりか、問題があれば、同じタンクに入れられた他の生乳も大損害を被ることになり、実習とはいえ、失敗は許されません」と説明してくれたのは高橋英明農場長。教育現場であると同時に、生物と食品を扱う真剣勝負の「現場」であることを実感させられた。

「農業で起つ」若者の学びの場

北海道名寄産業高校は、平成21年に設立された。歴史は浅いが、「本校は、名寄という地域とともに歩ん

きた3つの高校が独自性を保ちつつ、それぞれの歴史を引き継ぎ、一つの学校となりました」と校長の増田雅彦先生が話すとおり、4学科を見れば、酪農科学科は旧名寄農業高校、電子機械科・建築システム科は旧名寄工業高校、生活文化科は旧名寄恵凌高校の歴史を受け継いでいる。

酪農科学科の前身は、昭和16年に設立された北海道庁名寄農業学校である。その後、名寄農業高等学校となり、7、343名の卒業生を送り出して道北農業の発展に寄与した70年の歴史をもつ。現在は、道北の農業の担い手を育てる場として、全国で26校ある農業経営者育成高等学校の一つに指定され、農業経営者を育成するため、1年生は1年間寮生活を行うことが義務づけられている。

全校生徒300名余の70%が名寄市内出身、土別市を含む道北出身が25%であるが、「酪農科学科の生徒の半数近くは、名寄より北にあたる宗谷管内やオホーツクなどの酪農家の子弟です。生徒数は少ないですが、農業後継者である生徒の入学率は全国一番ではないかと思えます」と酪農科学科担当の教頭・西村博幸先生。農業と水産に関する科は全国から生徒を募集することができ、酪農を学びたくて遠く東京や神奈川、愛知などからの生徒も数名いるとのこと。

離農、後継者不足が叫ばれている中、



▲眠い中でも早朝実習の朝礼
▶早朝実習での搾乳作業



▲地元小学生に田植えを指導
▼住民が行列をつくる花野菜販売会
(写真提供/名寄産業高校)



の苗などが並ぶ。開店時期は、地元新聞や市広報、道の駅などで告知されるが、地元の人はショッピング開店を心待ちにしており、当日は開店前から行列ができ、あつという間に売り切れる盛況ぶりである。

F M局にも定期的に出演し、さまざまな情報発信を行う。そんな学校の活動を地域はやさしく見守っている。数十人の生徒に対して、広大な農場と経験豊富な教師陣が配されている環境は、ぜいたくとも思えるが、それだけ農業の後継者が少なく、志ある者への育成に力を入れているというところであろう。

親元から離れて酪農を学ぼうとする若者がいることに、頭が下がる思いがした。彼らの意欲に因應するため、同校では酪農科学科の一科で、酪農はもちろん、畑作、稲作、花き、食品加工、販売まで、果樹を除く農業のほぼ全体のしくみが学べる環境を整えている。

業高等学校」という名前のとおり、うちの学校は、名寄の産業と一緒に歩いている学校です」地域に根付いている学校は、同時に地域に開かれた学校でもある。酪農科学科では、名寄キャンパスに近い小学校2校を受け入れ、農産物の観察、田植えなどの農業体験学習を行っている。年10回ほどの体験学習を通して、生徒たちは子どもたちを指導する機会を得ることができる。

秋の収穫感謝祭では、収穫したもち米で餅をつき、地域に配り、ともに収穫の喜びを分かち合う。学校全体での地域貢献にも積極的だ。夏休み1日目には、「親子ものづくり教室」を開催し、全学科に関連した加工品などの販売やものづくり体験ができるイベントを行っている。また、生活科学科の家庭科クラブでは、毎年名寄駅待合室のイスに置く座布団を作成して寄付しており、建築システム科では、卒業制作のテーマとして「名寄市の未来都市計画」に取り組み、優秀作品は大手スーパーの一角に展示されている。

牛乳・乳製品は、米と並ぶ重要な基礎食品であり、自国でつくるのが当たり前の食品である。しかし、日本の酪農を牽引する北海道では生乳生産量が伸び悩む一方、飼料価格が高止まりし、その経営環境は厳しい。個々の酪農家が単独で汗を流しても限界があり、多岐にわたる課題を克服しつつ、新たな酪農経営のあり方の模索が続く。

卒業後は、農業大学や専門学校への進学のほか、それぞれの地元の農協、農林・畜産関係の技術センターへの就職、また家畜人工授精師を目指すなど、自営で働く前に、さまざま

春から秋にかけて月1回開店するアンテナショップ「みずなら」には、もち米や卵をはじめ、アスパラ、トウモロコシなどの旬の農産物、味噌、ケーキ、ソーセージ、チーズ、アイスクリームなどの加工品、野菜や花

毎年「地域の地域イベントである「なよる産業まつり」、商工会が主催する「アスパラまつり」などでは、高校がテントを設営して全校で祭りを盛り上げる。農作物や加工品だけではなく、バッチなどをつくって来場者に配布するなど、若い力が祭りに賑わいをもたらし、好評を博している。地元

酪農科学科では、厳しい現実と格闘する親の背中をしっかりと見据え、酪農・農業をわが天職と思いついて、覚悟をもって入学した若者が育っている。同科では、平成24年に初めての卒業生を世に送り出した。これまでの卒業生は40名ほどであるが、今後も少数精鋭で手塩にかけて育てられた若者たちが巣立っていく。彼ら一人ひとりが一粒の種となつて道北から北海道、そして日本の新たな地平に農業という大輪の花を咲かせることを切に祈りたい。

文/村上憲加 写真/満田美樹



平成26年度
過疎地域自立活性化
優良事例

若手漁師や「笑顔食堂」が地域の活力

【ビジョン早田実行委員会】 おわせしはいだちょう 三重県尾鷲市早田町

紀伊半島でトップの漁獲量を誇る尾鷲市の漁業。その中で、市南部にある早田町は人口減少、高齢化、自治組織の相次ぐ解散等で、漁業にも影響が出ていたが、産学官民連携による「ビジョン早田実行委員会」による新たな取り組みで、若者の移住と漁師たちの育成に努め、定置網漁に従事する漁師の半数が若い人たちで占められるようになった。同時に、女性の雇用創出をめざして始めた「笑顔食堂」も好評で、地域に活気が出てきている。

若い漁師たちが活躍する定置網漁

全国でも土砂降りの雨が降ることので有名な尾鷲だが、我々が出かけたその日も夕方から猛烈な土砂降りとなった。尾鷲駅まで出迎えてくれたのは、地域おこし協力隊員で「ビジョン早田実行委員会」の事務局を担当する石田元氣さん(27)。

「確かに雨がよく降りますね。でもドツと降ったあとはバツと晴れて気持ちのいい快晴の日が多いですよ」と、早田の自然環境の良さを語る。

尾鷲市は西部が急峻な山々、東部はリアス式海岸で、マグロの遠洋漁業も盛んな尾鷲漁港に次いで、九鬼港、早田港、梶賀港などがあり、年間を通じて200種以上の魚が水揚げされる良好な漁場になっている。

早田では「大敷網」という大型定置網が主体で、(株)早田



▲早朝4時、土砂降りの中を出航していく4艘の定置網船
◀早田港はリアス式海岸の良好な魚場だが、平地が少ないため、住宅は斜面を利用して建てられている

大敷には22名の漁師が所属している。湾を出てほど近い外海に全長約375m、水深65(25m)の網が設置されており、早朝と午後の2回、4艘の船が出て網を上げる。地元の漁師さんは原則として70歳を過ぎると定置網漁を辞めて他の漁に移るため、若い漁師の確保・育成が求められてきた。その結果、現在地元ベテラン漁師は三木漁労長ら5名で、それを支えるのが他所からきて10年ほどになる中堅漁師、さらに「漁師塾」を卒業して働く新米漁師が3名いる。

早朝に出航する定置網漁船の雄姿と若い漁師さん達の仕事ぶりをぜひ拝見したいが、天候が気になる。それに対して、「土砂降りでも海が荒れていなければ出航します。漁師さんも出てきます。様子を見てみましょう」と石田さんや漁協事務所の人はまるで気にしていない様子である。

漁港に近い民宿に宿泊、午前3時頃に車の音を聞き、身支度をして急いで浜へ出てみた。叩きつけるような雨と濃霧で海岸は真っ暗、海も湾の稜線も見えない。しかし漁港にはあちこちに街灯があるため、よく見渡せる。港には個人所有の小型船が十数艘繋がれ、その先に(株)早田大敷の大型船2艘と小型船2艘が停泊している。

やがて足音がして、次々にカッパを着込んだ若者がやってきた。大型倉庫のドアを開け放す人、バケツを持って船に乗り雨水をかき出す人、エンジンを点検する人、倉庫内で道具のチェック等をする人等々、土砂降りも気にせず、身軽に動き回る。

「ビジョン早田実行委員会」事務局の石田

さんもやってきて、「彼は漁師塾を出て1年目の漁師さん」あの人は5年以上のベテランさん」と等と教えてくれる。皆イケメンでスタイルもよく、着ているカッパも個性的だ。間もなく三木慶輔漁労長が現れて、皆と挨拶を交わして、倉庫の奥まった場所に座った。まだ3時半頃で、三木さんは黙々と網の手入れを始め、漁師さんたちも指定の場所に座って網編みを始めた。漁労長の下に監督が1名、船長、船頭、操縦士が各2名ずついるという。

三木漁労長は、「4艘に乗って沖へ出ますが、全員で一つの網を持つわけですから、チームワークが大切です。バラバラな行動は作業を遅らせ網を切ってしまうことにもなる。漁に出るか決断するのも私の役目で、現場へ出たが波が荒いため漁を止めるということもよくあります。無理な漁は網を切ったり人の命に係わる場合もある。今朝は霧も深いため4時すぎないと海が見えない、出航は波の様子をみて決めます」と言う。

入口付近で漁具をチェックしているのは監督の中井恭佑さん(27)。尾鷲市漁業体験教室塾に参加、大阪から漁師をめざして移住してきて6年経つ。漁師の魅力は「毎日自然も漁も変化があつて面白い。集中して思い切り働き、あとは時間があるので、家族との時間や趣味を楽しめます」と語る。就労に当たっては別の地区の大型定置網漁も候補だったが、(株)早田大敷の漁労長の人柄に惹かれて、ここに決めたという。ただし、奥さんや子供もできたので、住まいは隣の紀北町。

「漁師塾」を出て一、二年の漁師さんが出航の準備をしながら縄網の整備をしている。縄



▲▶漁具を手入する漁師さんたち
手前に漁労長や船長、奥の方に若手の見習い漁師たち。
出航前の寛いだ時間でもある



▲網の手入れをする三木漁労長



▲3時半には若い漁師が次々出勤し、漁船に乗り込んで点検
▼漁具の収納庫も開き、出航前に網や綱等を整備する



▶普段は波も穏やかな早田湾。
この時期はブリ、アジ、シイラ、サバ、マグロ等が捕れる



さん(32歳、奈良市出身)、3年目の吉田元治さん(33歳、豊田市出身)がおり、早川紳さん(40歳、大阪出身)、半田直巳さん(32歳、静岡県出身)さんらは漁師希望で移住、研修・体験を経て船団員となった。

午前4時を過ぎると空は白み出し、港やその先の森、波の様子が見えるようになった。三木船長はGOサインを出し、全員が素早く船に飛び乗り、指定の場所に立った。エンジンがかかり、4艘は荒れた海へ乗り出していった。

浜では帰港する漁船から魚介類を受け取るため、湯浅さんら漁業組合の職員数人が水槽に水を入れ容器を並べて待機している。「今日はすぐ引き返して帰ると思います、もしもの場合もあるので、迎える側も万全を期し

といつても綱を束にして編み上げたもので、間違えると腕など軽く骨折してしまうらしい。

「漁師塾」を出て漁師になった人には、2年目の柏木準也さん(24歳、愛知県出身)、1年目の浦和弘

ています」という。

しかし十数分もすると船たちは引きあげてきた。外海は6mを超える波で、漁は不可能だったようだ。多分我々の取材のためにサーブスで沖に船を出してくれたのだと思う。大漁のシーンには出会えなかったが、海という大自然の威力と漁師たちの心意気を見る貴重な体験ができた。

船から降りた漁師さんたちはひとまず自宅へ戻って着替えと食事をしてからまた浜へ戻り、午前中は漁具の整備をするという。明日土曜日は市場が休みのため休養日となる。

「早田漁師塾」は毎年秋10月頃に実施され、今後も1、2名ずつ塾生を募集していく予定だという。

「ビジョン早田実行委員会」の 設置・運営

「ビジョン早田実行委員会」(以下「実行委員会」)は、小学校の廃校、過疎化、高齢化(高齢化率66.2%)で、地域の将来に危機感を持った有志が県の中山間地域支援事業を活用して三重大学の協力のもと、地域資源や課題を話し合う「ビジョン早田」、学生との交流会「はいだといっしょ」等を重ねながら、平成21年に設立したものである。実行委員会には①漁業者部会②ホームページ部会③地域作り部会④防災部会⑤笑顔食堂の5部会があり、関心のある住民が部会に参加、外部の有識者も交えて企画運営を行ってきた。その中で生まれたのが漁業に関心を持つ若者を4週間にわたって受け入れて漁業や漁村の暮らしを学ぶ「早田漁師塾」。また飲食店のない町内で高齢

者や若手漁師向けに料理を提供しようとはじめた「笑顔食堂」は、女性の雇用創出をめざしての取り組みでもある。現在は約10名のお母さんが月一度魚介類を中心にしたお弁当を作り、高齢者や町内外で働く人に有料で提供している。

実行委員会の事務局代表に任命されたのが、昨年7月に尾鷲市地域おこし協力隊に採用された石田元氣さん。宮城県出身、京都の大学を出て東京の企業に勤めていたが、疲弊していく地方の状況を知りたい、現場で学び、地域のために働きたいと応募した。実行委員会の事務局は尾鷲漁業協同組合早田支所内にあるため、漁業のことから「笑顔食堂」の料理作りまで学び、オンラインで取り組んでいる。

ブログ制作をしているのが湯浅光太さん。尾鷲市で生まれ、早田は母の出身地。大学卒業後は名古屋で働いていたが、結婚、奥さんの出産を機にUターンを決意、早田支所職員として働きながらホームページ部会員として、ブログやFacebookで早田の情報を発信している。



▲(尾鷲漁協)早田支所勤務、ホームページ部会の湯浅さん
▶地域おこし協力隊員で「ビジョン早田実行委員会」運営責任者の石田さん。日本橋にある三重県アンテナショップで

皆が待っている手作り弁当
お母さんたちの「笑顔食堂」

月一度、お母さんたちが美味しい弁当を作る「笑顔食堂」の日が来た。配膳前日の午後、地域コミュニティセンター調理場へ伺うと、7、8人の女性たちが割烹着姿で準備に追われている。早朝には浜で水揚げした鱈を購入、これらを三枚おろしにして揚げ、野菜やキノコと共に中華風に煮付ける料理がメインで、きんぴら、出し巻卵、イカの味噌和え、野菜天ぷら、漬物等6、7品の料理に熱々ご飯を



添えた手作り弁当。今回は早田地区内から53、地区外から8食、合計111食の注文があり、早田の人は特別価格500円、集落外からの注文は700円で販売



▲出来上がった「早田笑顔食堂」弁当
一個ごとにカバーをつけビニール袋に入れて手渡す



▲前日から始まった準備。石田さんも一員として活躍



▲弁当はコミュニティセンター1階で販売。広場には野菜、果物、日用品を売る移動販売車も店開きして大賑わい



▲販売終了でやっと寛く笑顔食堂のメンバーたち
▶高齢者の家には手分けして弁当を届ける

●ビジョン早田実行委員会(尾鷲漁協早田支所内)
☎0597-29-2039
<http://billage.localbiog.jp/owase-haida/>

される。厨房室には大量の野菜が並んでいるが、前日に調理するものと天ぷらのように配膳当日に作るものとで対応は違ってくる。ご飯だけで約5升を炊くという。石田さんもエプロン姿で手伝いをし、皆から「ゲンキ君」と呼ばれて親しまれ、頼りにされている。会代表の東一代(ひがしよ)さんは、「彼は男性の目線に対応してくれ、料理の腕前もたいしたものです。月一度の弁当作りですが、イベントや農繁期でスタッフが集まらず中止することもある反面、敬老の日などお年寄りを当センターに招く食事会も年3回は開いています。笑顔食堂は女性の雇用創出という狙いもあるので、スタッフには一回5000円支払うように努力しています。500円では高いという年配者も集落にはおり、また鶏の唐揚げなども欲しい等いろいろな意見はありますが、魚を主体にしたおふくろの味は変えられません」と語る。

いよいよ弁当提供日。テーブルにはプラスチックの器が並び、女性たちは手分けして丁寧におかずを入れていく。出来立ての天ぷらやご飯をたっぷり入れて蓋をし、楽しいイラストが描かれた紙で包み、ビニール袋に入れて完成。尾鷲市役所からはいつも10食以上の注文があり、11時頃受け取りに来るが、集落の一人暮らし老人にはスタッフが手分けして自宅まで届ける。調理以外の労力も大変なのだ。弁当やおかずパックは12時半頃には完売、スタッフは厨房へ戻ってほつとしながら昼食を取った。



文/浅井登美子 写真/小林恵



「もんでこい」とミュージカルを演じる住民たち(那賀町企画情報課提供)

平成26年度 過疎地域自立活性化 優良事例

ふるさとへもんでこい! 熱烈ラブコール

【もんでこい丹生谷運営委員会】 徳島県那賀町

地域から若者たちが出て行って帰らない。それが地方の過疎化の最大の原因になっている。ほとんどの自治体や地域は、出て行ってしまった人にUターンを呼びかけることはなく、住民の中には子育てが帰ってくることは恥だ」とさえ思っている親もいる。そんな中で、戻ってこい(もんでこい)と熱烈にラブコール、戻らないならこちらから出かけようという活動を始めたのが「もんでこい丹生谷運営委員会」。平成21年に地域で活動する女性を中心に設立した委員会は、ふるさとの良さをミュージカルやビデオレターにして東京や大阪で交流会を開催してきた。それが機となって住民の町への愛着が一層高まり、U・インターンした人は100人以上になっている。

ミュージカルで「もんでこい」

那賀町は平成17年に、徳島県西部、地理や歴史、産業や文化面で古くから結びつきが強かった丹生谷地方(旧5町村(鷺敷町、相生町、上那賀町、木沢村、木頭村)が合併して誕生した。面積約700㎡という広大な中山間地に合併当時1万1604人が暮らしていたが、少子高齢化が一段と進み、合併10年を経て人口は9322人、高齢化率は42.4%(平成27年)になっている。

那賀町を取材に來ていたジャーナリストの「地元へ帰らないならこつちから東京の息子の所へ押しかけよう」という提案が契機となり、平成21年に町内の有志が「もんでこい丹生谷運営委員会」(以下「もんでこい」)を設立した。

同会二代目会長の殿谷加代子さんは「私の住む木沢地区は剣山麓にある中山間地区で、高齢化率は60%、小学校も昨年ついに廃校しました。木沢に限らずどの地区でも、高齢世帯か一人暮らしのお年寄りが増えている。で

●もんでこい丹生谷運営委員会(那賀町郷土館内)
☎050-8809-7807 <http://www.montekoi.jp>
那賀町企画情報課 ☎0884-62-1184

も子供は見舞いにも殆ど帰らず、親たちも子供に迷惑をかけたくないので、身体が病んでいても帰ってきてくれとは言えない。なら私たちが会を作って『もんてこい』と呼びかけようと活動をはじめました」と語る。

殿谷さんは旧相生町で保健師をしており、子供たちを都会に出して独り暮らしをする高齢者たちを長年見てきた。

当初は「もんてこい」という表現はきつ過ぎるという意見も多く聞かれたが、ミュージカルにして町の現状や住民の気持ちを訴えようと提案したのが蔭岡美恵さん。やはり保健師で、「那賀町縁結びの会」の会長でもある。縁結びの会には38名の世話人と約280名の会員がいて、19組を成婚している。

「もんてこい」活動に賛同して運営委員になってくれたのは各地区の町内団体の代表者や協力者たち。月一度ずつ会合を開いて現状報告と課題等を話し合ってきた。町の素晴らしさや人情の厚さを伝えたい、それには「ここには大切なものがある」とミュージカル仕立てにするのがベストだと、歌と踊りに挑戦してきた。

「おまえは旅立ち 俺はここに残ったー(中略) 必ず 俺はここで守っているから もんてこい ふるさとに」

これは「もんてこい」が交流会やイベントの折りに公演するミュージカルのテーマソング。作詞は蔭岡美恵さんで、作曲は長女の蔭岡みくさんが担ったという。ラストで皆でテーマソングを歌うときは、今では子供からお年寄りまでが参加して大合唱となる。

脚本は毎回内容を変えて、袖絞りや郷土料

理の「はんごろし」等、那賀町の生活をリアルに再現し、笑いと感動を呼んでいる。素人とは思えないと好評である。

同ミュージカルは町内や東京・大阪で開催した「那賀町祭」等で公演され、東京会場の後は地元で、翌年は大阪でというように開催されてきた。平成21年秋には、那賀町に長年出かけてきて膨大な写真を撮り続けてきた中野建吉の写真展と「もんてこい」の寸劇を品川区総合区民会館「きゅりあん品川」で開催した。ミュージカル公演、地元ヘルスメイトの女性たちが作った郷土料理の会食会、物産店、そして最後はみなで阿波踊りを楽しむというのが定番になっている。

交流は「関東ふるさと会」に発展して

去る7月18日、東京グリーンパレスで、第2回那賀町関東ふるさと会定期総会が開催された。ふるさと会は昨年5月に設立されたが、前身は平成21年に品川で開催した「もんてこい丹生谷那賀町祭&中野建吉写真展品川」で、そのとき会場に来てくれた人たちの多くがふるさと会員になっている。今年のふるさと会にも昨年同様に約70名(地元那賀町から上京した関係者10名を含む)が参加して盛況を呈した。

坂口博文町長や来賓の祝辞、審議報告の後には、交流会パネルディスカッションとして4名のパネラーが意見を述べた。地方の仕事や移住の情報誌を制作する堀口正裕さん、美波町で移住促進事業を行う小林陽子さん、那賀町へIターンした高木健多さん、大城敬裕さん。U・Iターンで問題となる仕事や住居問

題が討論され、空き家物件の登録や改装に町もさらに力を入れていくことになった。続いて「もんてこい」殿谷さんの乾杯で徳島県出身・東京本社の企業等が差し入れた珍珠等を味わいながら昼食会を楽しんだ。

文・写真/浅井登美子



▲左から、パネラーの堀口さん、小林さん、高木さん、大城さん
▲上/和気あいあい、関東ふるさと会 下/那賀から上京した生杉久江さんを娘家族や孫が出迎えて会食を楽しむ



◀左/現・縁結びの会会長の西谷さん
右/乾杯の首頭をとる殿谷さん



若者が北海道各地で環境ボランティア活動 NPO法人「ezorock」



▲イベントや祭りなどでごみの分別をナビゲート



▲北海道の旅で交流を楽しむ学生たち



▲大雪山国立公園で自然保護活動の手伝い

北海道の各地で若者がイベントのごみの対策や、農作業、森林作業、国立公園や山岳等での環境保全活動等に従事しながら、交流や旅を楽しむプロジェクト。7つのプロジェクトが道内20以上の市町村で行われ、年間延べ3300人の若者が参加している。

スタートは平成13年、石狩市で開催した野外音楽フェスティバル「RISING SUN ROCK FESTIVAL」。50年後も野外で気持ちよく音楽を聞いていたい、という思いから、ごみの分別の呼びかけの活動を実施、翌年から青年環境団体「ezorock」を設立して、イベントで発生した生ごみから堆肥を作り翌年のイベントの食材として戻す活動等、北海道各地の環境保全活動等のボ

ランティア活動を行ってきた。企業、自治体、町内会や各NPOと連携して、地域で発生している課題を若者のアイディアやマンパワーを生かして活動を展開し、平成25年にNPO法人「ezorock」として法人化した。本部を札幌市に置き、5名の常勤スタッフが活動の企画運営や地域との連携、情報発信に当たり、現場では活動経験年数の長いコアスタッフがコーディネートし、活動を支えている。

主な活動は、①イベント環境対策活動「Earth Care」/ イベントから発生するごみの分別ナビゲートの運営 ②RSRオーガニックファーム / ①で回収した生ごみを堆肥にしてジャガイモを栽培、再びイベントの食材として還元

③ふくしまキッズボランティア事務局/ 福島の子供たちを北海道に長期受け入れる際必要となるボランティアの育成及びマッチング ④大雪山国立公園保全活動/ 大雪山旭岳における登山者への環境保全へ参加の呼びかけによる自然保護活動 ⑤プロジェクトNINOMIYA / 未活用の木材等を山から降ろして薪に加工して販売し、その収益によって人材の育成を行う活動 ⑥サイクルシェア「ポロクル」/ 札幌市内における自転車の共同利用の仕組みづくりと、自転車ルール・マナーの啓発 ⑦レコードシェアリング「RECO」/ 家庭に眠るレコードを回収し、利活用を進める取り組みなど、多岐にわたる。具体的に活動の実績をみると、①のイベント環境対策活動では、二日間で約6万人が訪れるRISING SUN ROCK FESTIVALにおいて、長年実施してきた「フェスティバル史上最強の13分別」の展開により、リサイクル率も80%以上となった。また、昨年より新割りコーナーを設置し、地産地消エネルギーについて学ぶ機会を加えたという。

また、5年間を目標に行われてきた「ふくしまキッズ」では、2011年から、2015年の春までに666人参加、延べ4754人の若者がボランティアとして活動に参加し、子どもたちに思いきり遊べる機会を提供した。また、活動に参加した若者も地域の人や自然と触れたことで、「地域つ

マツタケ山の整備から防災林の再生まで NPO法人「森のライフスタイル研究所」

「森で遊び、森でくつろぎ、森で出会う」そんなライフスタイルが欲しい。そのためには人が森に入り、森を知り、森を保全することが必要である。まず身近にある山林や日本本の森の現状を知ってほしい、そして植樹等を手伝ってほしいと、都市住民や企業に呼びかけてきたのが「森のライフスタイル研究所」。遊撃隊員兼代表理事所長の竹垣英信さんが平成15年に任意団体として設立、17年にNPOに法人化した。現在のような、首都圏の若者や企業の社員等に呼びかけて森林作業を定期的に行うツアーは平成21年にスタート、長野県林務部や市町村と協働して進めている。

現在、早朝に新宿をバスで出発して夕方には帰京する日



▲防災林の再生(クロマツの植樹)

くりの仕事がしたい」と移住し就職するものも出てきた。今後もさらに、北海道の課題に取り組みながら、若手人材を育成する仕組みづくりを進めていく。

・NPO法人 ezorock
☎011-5622-0081
<http://www.ezorock.org/>

帰りツアーが年間20回近く行われ、継続して参加する人が多くなっている。作業の後は、地域のお母さんたちが用意した昼食会、レストランで郷土料理、温泉なども楽しめるようになっており、それが魅力の一つになっているようだ。12月には自分で伐りだした木を使ってニッセというデンマークの森の妖精づくりも行った。

全国過疎問題シンポジウム 2015 in かがわ 平成27年10月8日(木)～9日(金)

過疎・離島で輝く～地域の資源を磨き、交流を生み出す～

10/8 全体会・交流会

高松市 アルファあなぶきホール

- 13:00 開会式(開会宣言 主催者挨拶 歓迎挨拶)
 13:20 平成27年度過疎地域自立活性化
 優良事例表彰式
 14:05 基調講演
 「過疎地域における地方創生とは」
 小田切徳美氏(明治大学農学部教授)
 15:25 パネルディスカッション
 「過疎・離島で輝く」
 ～地域の資源を磨き、交流を生み出す～
 「コーディネーター」
 萩原なつ子氏(立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授)
 [パネリスト] 五十音順
 伊藤洋志氏(ナリワイ代表)
 小田切徳美氏(明治大学農学部教授)
 北川フラム氏(瀬戸内国際芸術祭総合ディレクター)
 栗田隆義氏(香川県まんのう町長)
 西郷真理子氏(株式会社カンパニーネットワーク代表取締役)
 17:30～ 交流会



瀬戸内海

10/9 分科会・現地視察

東かがわ市・直島町・小豆島町・琴平町

東かがわ市分科会

東かがわ市交流プラザ

- ・優良事例発表、意見交換
 ・(一社)南島原ひまわり観光協会(長崎県南島原市)
 ・くりはらツーリズムネットワーク(宮城県栗原市)
 ・五名活性化協議会(香川県東かがわ市)
 ・(一社)IORI倶楽部(福島県三島町)
 「コーディネーター」
 宮口侗迪氏(早稲田大学教育・総合科学学術院教授)
 [現地視察] てぶくろ資料館、マーレリッコ
 (安戸池・海と魚の体験学習館)、讃州井筒屋敷

直島町分科会

直島町総合福祉センター

- ・パネルディスカッション、意見交換
 「地域資源の活用で輝く
 ～空き家を活用したまちづくり～」
 「コーディネーター」
 古川尚幸氏(香川大学経済学部教授)
 [パネリスト] 五十音順
 かわべまゆみ氏(いまねネット(株)専務取締役)
 濱中 満氏(直島町長)
 眞鍋邦大氏(株459・(株)四国食べる通信代表取締役)
 山岸正明氏(直島町地域おこし協力隊)
 山出淳也氏(NPO法人BEPPEU PROJECT代表理事)
 [現地視察]
 家プロジェクト ANDO MUSEUM

小豆島町分科会

サン・オリーブ

- ・パネルディスカッション、意見交換
 「未来を拓く小豆島の資源
 ～学び、育み、活かすために～」
 「コーディネーター」
 石田憲治氏(農村工学研究所農村基盤研究領域)
 [パネリスト] 五十音順
 小野寺 浩氏((公財)屋久島環境文化財団理事長)
 川宿田好見氏(「世界遺産化」対策室学術専門員・小豆島町地域おこし協力隊)
 小森一秀氏(株モクモク流地産産製所取締役事業部長)
 塩田幸雄氏(小豆島町長)
 古川安則氏(東條地域農業集団会長)
 [現地視察]
 天狗岩石切丁場・ファームステーション安田
 の郷・中山千枚田

琴平町分科会

琴平町文化会館

- ・優良事例発表、意見交換
 ・雲南市(島根県雲南市)
 ・あば村運営協議会(岡山県津山市)
 ・大野地区公民館(鹿児島県垂水市)
 ・田幸ふるさとランチグループ(広島県三次市)
 「コーディネーター」
 岡司直也氏(法政大学現代福祉学部准教授)
 [現地視察]
 旧金毘羅大芝居(金丸座)・金刀比羅宮
 [事務担当] 香川県政策部地域活力推進課
 ☎087-832-3125 (担当/宮崎、澁谷)

編集後記

▼ある山村の旧開拓集落に入村して休耕地で高原野菜を栽培するグループを、周辺の人々は「ヒッピー」と呼んで敬遠していた。訪ねてみると有機栽培にこだわるごく普通の女性たちで、「あまり地域の人と交流しないので流れ者が来たと思われる」と苦笑していた。いま地方ではUターンして定住してくれる都市住民を募集しているが、自分の子供たちに帰郷を促す農家は少なく、Uターンは恥だとさえ思う人もいる。そのため、都市からきて休耕地を一生懸命耕す若者たちに感謝しつつも理解できない。地域の過疎化を食い止め活性化するには、まず農民や地域の人の意識変革が必要だと、いつもながら実感する。そんな意味でも徳島県那賀町の「もんでこい(戻ってこい)」活動に広がり期待したい。(A)

De POLA No.46

[でぼら] 2015年

発行日/平成27年10月5日

発行/全国過疎地域自立促進連盟

〒105-0001 東京都港区虎ノ門一丁目13番5号
 第一天徳ビル3階

☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602

http://www.kaso-net.or.jp/

編集/☆編集工房アド・エー

森林作業は、長野県各地のフィールドがメインになっている。将来にヒノキの材木や薪ストーブの燃料を収穫するための森づくり(長野県佐久市)、未利用放牧地を元のブナ林に還元させる森づくり(木島平村)、アカマツ林を整備してマツタケを収穫しようと目論む森づくり(伊那市)等を年間を通じて行っている。もう一つの特色が、東日本大震災以来、千葉県九十九里

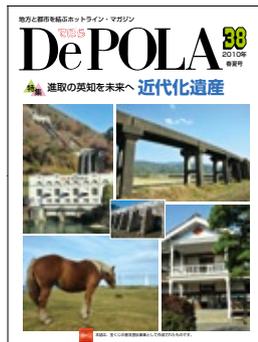


▲アカマツ林にたまった落ち葉をはいて整備する作業

浜の海岸防災林(山武市蓮沼)を市民や企業からの資金や人手を集めながら再生してきたことだろう。これまで神宮球場2つ分の面積を再生している。30回に迫る活動を2000人のボランティアの力でやってきた。2万7000本の植樹とその保育活動を続けている。最初に植えたクロマツの苗木は2mを超えるまでに成長している。さらに年数回は、林業の専門家による講演会と交流会を東京で実施、また廃材を活用したペレットの販売普及にも力を入れている。NPO法人「森のライフスタイル研究所」伊那本部 ☎0500-3708-0023 東京事務所 ☎03-6274-8982 http://www.slow.gr.jp

[DePOLA] Back Number (近刊号)

No.38 進取の英知を未来へ——近代化遺産



◆北の大地に夢を拓いた北海道遺産／根釧台地の格子状防風林(根室地区) 稚内港北防波堤ドーム(稚内市) 佐賀家ニシン番屋(留萌市) ◆新時代を先取りした近代化施設／尻屋灯台と寒立馬(青森県東通村) 旧大湊水源の堰堤(青森県むつ市) 読書発電所・桃介橋(長野県南木曾町) 三角西港の石積埠頭(熊本県宇城市) 旧郡築新地桶門他(熊本県八代市) ◆政都・郡都として賑わった街他／旧登米高等尋常小学校(宮城県登米市) 鑄造造船で近代化に挑戦(山口県萩市) 石見銀山・温泉津温泉(島根県大田市) 魚梁瀬森林鉄道(高知県馬路村他)

No.42 新たなコミュニティの実践——農山漁村の再生



中山間地域の住民をサポートする(高知県仁淀町・越知町・いの町) スキー場跡地に森林を復元(長野県長和町) 天草漁師の「ひと網オナー制度」(熊本県天草市有明町) 油屋・万屋・車屋を地区で運営(広島県安芸高田市川根) 「元氣かい! 集落応援プログラム」(和歌山県田辺市) 協力隊から起業・就職(北海道喜茂別町) 女子大OB生の田舎暮らし & 地域おこし(茨城県常陸太田市) 村立おといねっぴ美術工芸高校(北海道音威子府村) [自然エネルギー利用] 観葉植物栽培日本一(鹿児島県指宿市) 環境モデル都市(高知県橋原町)

No.39 交流・協働で地域を元気に



東京農大生の里山保全活動(福島県鮎川村) 「風の谷・森林の楽校」(岐阜県揖斐川町) 八木沢集落の地域おこし協力隊(秋田県上小阿仁村) 協力隊で農山村生活を体験(岐阜県高山市高根町) 栗島に住んで二年目・西畑隊員の報告(新潟県粟島浦村) 「さみの定住を支援する会」(和歌山県紀美野町) 「ゆめ倶楽部2」 「米作り塾」(和歌山県日高川町) お母さんの知恵袋「四季の里」(静岡県川根本町) 「おやきの里」(長野県小川村) 大石田そば街道(山形県大石田町)

No.43 1ターンして新規就農——地域に農の新しい風



担い手を育成して地域活性化(大分県由布市庄内町、豊後大野市) 河岸段丘は命と恵みの大地(新潟県津南町) 「南郷トマト」の若い担い手(福島県南会津町) 農家の心意気をニューファーマーに(北海道士別市朝日地区) 自家製シモンで大三島リモンチェッロ(愛媛県今治市上浦) 「農業をする」という人生の作り方(岩手県西和賀町) 地域の産直市「お山の大将」(徳島県美波町) 休耕田にしない・親子で米作り(広島県庄原市総領) むかし味「げんたの野菜」(山梨県笛吹市芦川) 高原を彩るヒマラヤの青いケン(長野県大鹿村) 環境未来都市しもかわ(北海道下川町)

No.40 夢を紡ぐ——地域伝統のものづくり職人



大館曲げわっぱ(秋田県大館市・栗久) 南木曾「木地師の里」(長野県南木曾町・野原工夫) むらかみ町屋再生プロジェクト(新潟県村上市) 三津谷煉瓦窯再生プロジェクト(福島県喜多方市) 伝統の切れ味、土佐打刃物(高知県香美市土佐山田町) からむし織の里(福島県昭和村) い草の育成とゴザ織り(熊本県八代市) 三好お札の里(徳島県三次市池田町) 縮れ穂先を編み上げる南部帯(岩手県九戸村・高倉工夫) 秋山郷が育む猫づくら(長野県栄村) アイヌ文化を未来へ伝える(北海道平取町二風谷)

No.44 人々が集って、はじめる——ふるさと再生作戦



「美味しい」の感動をつなぐ島(山口県周防大島町) 貴重な動植物と農業青年を育む里山(鳥取県日南町) 四ヶ村の棚田と射湯温泉で創るふるさとにぎわい(山形県大蔵村) 主役は子供たち(福島県伊達市月舘町) 馬にふれ、馬たちの時間で暮らす(北海道浦河町) ボランティアが続ける森や里山支援 / JUON NETWORK 森の楽校 田畑の楽校 産学官でオホーツク地域産業の創成(東京農大オホーツク実学センター) 平成25年度過疎地域自立活性化優良事例 / 民家は地域資源、リフォームして定住促進へ「奥矢作森林塾」(岐阜県恵那市) 生姜栽培を復活して開拓魂を受け継ぐ(鹿児島県西之表市) 雪浦ウイーク(長崎県西海市) 寄り会みなまた(熊本県水俣市) 若松ふるさと塾(高知県新上五島市) 会津山都そば協会(福島県喜多方市)

No.41 これが自慢の味・風土・人——地域ブランド作戦



生いもこんにゃく NO.1(群馬県東吾妻町・小山農園) 450年の歴史を経て、西海えだおれなす(長崎県西海市) 飼料用米生産と「こめ育ち豚」(山形県遊佐町) 森を救う家具「ニシアワー」(岡山県西粟倉村) 京丹波の伝統作物(京都府京丹波町) 山里文化を語り継ぐ「遠野物語」の里(岩手県遠野市) 富良野ラベンダーの里(北海道中富良野町) 米蔵・しおまち唐琴通り・須恵器(岡山県瀬戸内市牛窓) 「森の香菖蒲ご膳」(佐賀市富士町) トキと暮らす郷(新潟県佐渡市) 特別ルポ／東日本大災害・災害地からの報告

No.45 地域の創造活動を支援する



集落再生をめざす小さなユートピア郷・大宮産業・みやの里(高知県四万十市西土佐) 移住してくる家族をバックアップ(長野県伊那市高遠町) 地域で安心して暮らす / ゆうばりコンパクトシティ構想(北海道夕張市) 各分野の専門家が地域に根を張って / 対馬市島おこし協働隊(長崎県対馬市) 自然と地域の中で輝いて学ぶ「鳥留学」 県立隠岐島前高校、島まるごと図書館プロジェクト(島根県海士町) 学生の提案をビジネスに生かす / 十日町市「トオコン」、農業体験 ボランティア活動に無料バス(新潟県十日町市) 風土に合った「小さな農業」の創出(山形県舟形町) 山里の暮らしの知恵と資源を生かして / もくもく市場、栃尾里人塾(岐阜県郡上市明宝) 地域の見守り役も担って / 予約型乗合タクシー(福岡県八女市)

★詳しい内容については <http://www.kaso-net.or.jp> を参照ください。残部が少ないため進呈出来ない号もあります。